

# 囲碁の「酷」と人智の「魔」

## —— 究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup> 4強の特質・行方 (1)

夏 剛 ・ 夏 冰

### 第 1 章 人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>の飛躍的な進化と電<sup>コン</sup>脳<sup>ピュータ</sup>社会の「電<sup>でんのう</sup>能<sup>でんのう</sup>・電<sup>でんのう</sup>惱<sup>でんのう</sup>」

#### 世界の「国際<sup>インターネット</sup>電<sup>コン</sup>脳<sup>ピュータ</sup>網元年」から「人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>活躍元年」

人類は抜群の能力と特有の文化を持つ「万物の靈長」と言われる。靈長類の進化の末に現れた此の「超級動物」は、自ら及び社会を更に進化させる強い意志・高い技量の持主である。人間は地球上での直立歩行に止まらず、脳・手の発達に由る道具製造の特技を駆使して、有人宇宙飛行船の月面着陸まで成し遂げた。其の気宇壮大の「花火」が鮮やかに満開した1969年、米国の複数の大学・研究所に設置された4台の通信情報処理装置（IMP）を相互接続した蓄積交換通信の実験が成功し、後の国際電脳網の母体に成る蓄積交換通信（ARPA）網の運用が開始した。44年にハーバート大学で開発が始まった電子頭脳（computerの旧称electronic brain、日本語にも入った中国語の「電脳」[和文読み＝「でんのう」]の由来）は、四半世紀後の此の長足の進展を踏まえて飛躍的に加速した。そして20年後、米国に於ける国際電脳網と商業電脳網との電子郵便物交換等を以て世界の「国際電脳網元年」が訪れた。

去る千年紀の半ば以降の世界史の年輪には、西暦の下2桁が89と為る年は可く転換点として刻まれている。世界帝国西班牙の「無敵艦隊」130隻が「8.8」海戦で英軍に大敗した翌年の1589年、仏蘭西国王アンリ3世が狂信僧に刺殺され（歿年37）260年余り続いたバロア朝が断絶した。西班牙の大西洋制覇を打破し同国を王室破産（1596）にまで追い込んだ英国では1689年、名誉革命の直後に議会在ウィリアム3世と妃メアリー2世の前例の無い共同即位の条件として、国民の権利・自由を宣言し王権に対する議会の優位を主張する「権利宣言」を提出し、「権利章典」の制定に由って立憲政治の基礎を確立した。100年後に仏蘭西では革命後

の憲法制定と共に国民議会が「人権及び市民の権利宣言」を採択し、1776年に英国の植民地から独立した米国ではワシントンが合衆国初代大統領に就任した。1889年には日本は「大日本帝国憲法」の発布で東亜細亜初の立憲国家と成り、中国で西太后の院政の下で光緒帝の親政が発足した。1989年には此の2カ国は其々昭和から平成への転換(1.7)と天安門事件(6.4)を経験し、「老人治国」の最高実力者鄧小平の引退の日(11.9)に「柏林の壁」が崩壊し、東欧社会主義陣営の解体と並行して米・ソ首脳の合意(12.3)で冷戦が終結したが、国際電脳網の静かな出現と急速な普及は人類の新紀元に相応しい画期的な出来事と言える。

20世紀の未来像の一端を窺わせた1990年代の最初の歴史的な事件として、米・英を始めとする多国籍軍の最先端技術が戦争の有り形を変えた湾岸戦争が挙げられる。侵攻側が短期間(91.1.17~2.28)で最小限の犠牲で圧勝を収めた要因には、グローバル・ポジショニング・システム・衛星通信システムの活用や精密定点誘導空爆の実施等がある。弾頭に付く撮影機が即時で捉えた標的への接近→命中の光景が世界を震撼させ、国防と科学技術を工業・農業に次ぐ「4つの近代化」の分野とした中国では、解放軍の総参謀部・総政治部・総後方勤務部と並ぶ総装備部が98年に新設された。翌年に軍人作家喬良・王湘穂の「超限戦」論が世に問うた(『超限戦——兩個空軍大校対全球化時代戦争と戦法的想定』[限界を超える戦争——全球化時代の戦争と戦法に対する2人の空軍大佐の想定]、解放軍文芸出版社[中国の出版社は特に断りが無い限り日本と同じく首都に在る]。日本語版=坂井臣之助監修、劉琦訳、共同通信社2001年刊『超限戦 21世紀の「新しい戦争」])が、制約無き戦争の新兵法で提起された「恐怖戦」は01年「9.11」同時多発自爆襲撃で現実と成った。

「1つの妖怪が欧州を彷徨っている——共産主義の妖怪が(中国語の定訳=「一個幽霊、共産主義的幽霊、在欧洲徘徊。)」と、国際的社会主义運動の「教祖」マルクスとエンゲルス(俱に独逸人)は『共産党宣言』(1848)の冒頭で語った。101年後に建てられた中共政権は1991年末のソ連の自滅にも多大な衝撃を受けたが、共産主義が退潮した今の世界を彷徨う最大級の「怪物」は「恐怖主義」と「最先端技術」であろう。2000年の世界株式市場の情報産業企業バブルは最先端技術への言信の恐ろしさを見せ付け、ノーベル経済学賞受賞者も含む専門家集団の金融工学理論に基づく投資は、1998年の東亜細亜金融危機や2008年の欧米発のリーマンショックで裏目が出た。1987年10月19日(「暗黒の月曜日」のニューヨーク証券取引所発の地球規模の空前の大暴落も、機関投資家等の電脳自動売買に由る売りが売りを呼ぶ「合成の誤謬」の暴走であった。70年代から米国大統領が毎朝受け取る世界中の重大危険性予測の順位・変動値の一覧には、文明の利器に対する人類の依存への警告の様に国際電脳網の壊滅が近年常に首位に出ている<sup>1)</sup>。

世界長者番付で長年2、3位を占めて来た米国の投資家バフェットは2016年4月30日、自ら統率する投資会社の株式総会で3万人超の参加者に対して演説・質疑応答を行う際、年末の

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方(1)(夏剛・夏冰)

大統領選に就いて「誰が成ろうと米国の経済を終らせるまい」と楽観的な展望を示し、又米国経済の危険性と次期大統領の最重要課題と為る国家的脅威として“CNBC”を挙げた<sup>2)</sup>。頭文字で表したCyber・Nuclear・Biological・Chemical(電腦空間・核・生物・化学)攻撃は、矢張り電腦・電腦網に執拗に仕掛けられて已まない1番の方が日常的且つ継続的である。其の故郷であるネブラスカ州オマハに本社を置く此の世界最大の持株会社の総会は、経営権取得(1965)以来今回初めて6時間に及ぶ進行の様子が電腦網で中継された。彼を「股神」(株式投資の神様)と崇める無数の中国「股民」(株の個人投資家)の為に、又中国の経済規模・国力と世界への影響度の増大に対応する様に中国語の同時通訳も付いたが、米国が近年対応を迫られている安全保障・外交上の面倒な問題の1つが、「超限戦」論の母体を為す人民解放軍が関わった中国発と疑われる電腦空間への攻撃である。

『広辞苑』第6版(岩波書店, 2008)の「サイバー【cyber】」の項は、「(サイバネティクスから)コンピューターやコンピューター・ネットワークに関すること」と説明されている。4つの子項目は「—スペース【cyberspace】」(=[SF作家ギブソン〔William Gibson 一九四八〕の造語]コンピューターやコンピューター・ネットワーク上で電子的に作られた仮想的な空間のこと。→バーチャル・リアリティー),「—テロ」(=[cyber-terrorism]国家や社会基盤の情報システムに不正に侵入し、データの破壊や改竄<sup>せうざん</sup>などを行うことで、社会機能を不全に陥らせる行為),「—パンク【cyberpunk】」(=[SFの一種。コンピューターが支配する未来社会を描くもの),「—モール【cyber mall】」(=[ウェブ上で、複数の店で買い物ができるサイト。電子商店街])である。第5版(1998)では新設の「サイバーパンク【cyberpunk】」しか入らなかった(語釈は現行版[以下、辞書の引用は特に断りが無い限り現行版に拠る]に略同じ、只「一種」の「種」が無かった)ので、日本で仮想的・文学的な概念から現実的・社会的な鍵詞と化して一般化に至った時期は、終戦直後の米国で芽生えた野心的な学説の世界的な認知・応用に必要ない歳月を思わせる。語源の「サイバネティクス」(cybernetics)は初版(55)にも有る当該項目の紹介の通り、「(“舵手”の意のギリシア語に由来)通信・自動制御などの工学的問題から、統計力学、神経系統や脳の生理作用まで統一的に処理する理論の体系。一九四七年頃アメリカの数学者ウィナーの提唱に始まる学問分野」である。

『日本国語大辞典』第2版(本文[以下類書同じ]全13巻, 小学館, 2000~02)には【サイバー】が有り、語釈の「(語素)(英cyber)他の名詞の上に付いて、コンピューターやネットワークに関する意を表わす」の後に、挙例の「“サイバースペース”“サイバーテロ”」も付いているが、関連の立項は【サイバーパンク】(=[(名)[英cyberpunk]コンピューターの電子回路の中に人間の意識を入り込ませてゆく、新潮流のSF小説])だけである。日本最大規模を誇る国語辞書が此の点で中型の『広辞苑』に劣る理由として、21世紀の暁には猶情報化社会

の爛熟と脆弱が顕在化していなかったという事も有ろう。初版（日本大辞典刊行会編，20巻，1972～76）から有る【サイバネティクス】の解説は、「(名) (英 cybernetics ギリシア語の“船舶操縦術・舵とり”に由来する語) 第二次世界大戦後に起こった科学の新しい分野。機械、動物、社会にあらわれる制御と通信・情報伝達の問題を統一的に取り扱い，人工頭脳の実現やオートメーションの改良をめざすもの。アメリカの数学者ウィーナーの著『サイバネティクス』（一九四八）以来，多くの研究者が参画するようになった」と為り，人工頭脳への言及で『共產党宣言』の100年後の「“舵手”宣言」の深遠な意義を実感させる。用例に「人工衛星も現実である（1958）〈荒正人〉“その根本になるものは，ウィーナーのサイバネティクスという理論である”」が挙げられたが，宇宙進出競争の先陣を切ったソ連の世界初の人工衛星打ち上げ（57.10.4）の前年に，米国の計算機科学者・認知科学者マッカーシー（29）が「人工知能」（artificial intelligence）を首唱した。ソ共第20回党大会でフルシチョフ第1書記が秘密報告（56.2.24～25）でスターリンを指弾し，其の青天の霹靂は翌年の毛沢東独裁体制の確立の近因と後年のソ連解体の遠因に成ったが，マッカーシー等が集まった同年の人工知能研究会は人類の根幹に関する変革の萌芽と言える。

69歳（1894.11.26～1964.3.18）で死去したウィーナーは「スプートニク1号」の成功を見たが，享年84（1927.9.4～2011.10.24）のマッカーシーは人工知能の大金星を見届けずに逝った。彼が1955年に考え出し翌夏のダートマス（開催場所の大学）会議で使われた「人工知能」は，懐胎・誕生の60周年に当る2015、16年に相継いで凄技を披露し人類に多大な衝撃を与えた。15年9月30日締切の第3回「星新一賞」（日本経済新聞社主催）の応募作には，人智＋人工知能の執筆に由る掌編小説が4点有り複数の「怪作」（「快作」を振った造語。「怪物」に由る怪異な作品の意）が1次審査を通過した。中の「きまぐれ人工知能プロジェクト 作家ですのよ」（開発者＝まつばらひとし 教授を頭とする公立はこだて未来大学の研究グループ）は，人間8割・電脳2割の合成が発展途上の性質を帯び同類作品と共に3次中の2次で落ちた<sup>3)</sup>が，「電脳空間」単語群の中で日本の国語辞書が偏愛した1980年代以降の科学幻想小説の異種から，電脳の電子回路の中に人間の意識を入り込ませて作らせる新種の科学幻想小説が生れるかも知れない。10月5～9日にGoogle社（米）傘下のDeepMind社（英）が開発した電脳運用指令体系AlphaGo（作品扱いにつき欧文の場合は斜体で表示する）と，欧州囲碁王者3連覇中の樊麾二段（中国出身・仏蘭西籍，35）との5番対局がロンドンで行われ，後者の0:5の惨敗で電脳が互先（対等の条件）で職業棋士に勝つ史上初の快挙が遂げられた。同月10日に日本情報処理学会は清水市代女流王将・王位に平手（双方が互角の手合）で勝った（10.10.11）以来の実績を踏まえて，職業棋士に対する事実上の勝利宣言の様に電脳将棋プロジェクト（責任者＝松原仁）の終了を表明した<sup>4)</sup>。翌年1月27日に英国の科学誌『自然』電子版で論文・棋譜付きの「AlphaGo」戦勝が公表され，満天下の驚愕を増幅させる様に世界

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方(1)(夏剛・夏冰)

最強級の李世<sup>イ</sup>石<sup>セ</sup>九<sup>ド</sup>段(韓国)に挑む5番碁が予告された。3月9、10、12、13、15日に首爾<sup>ソウル</sup>で交<sup>かわ</sup>される激戦の電<sup>ネ</sup>脳<sup>ット</sup>網<sup>の</sup>中<sup>の</sup>継<sup>は</sup>は延<sup>べ</sup>べ2.8億人の視聴を集め、斯<sup>か</sup>くして第<sup>A</sup>3次<sup>I</sup>人工<sup>I</sup>智能<sup>I</sup>熱<sup>ム</sup>の中で世界の「人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>活躍元年」が華やかに幕を開けた。

## 「蹴<sup>サッカー</sup>球<sup>の</sup>脳<sup>い</sup>」の要る囲碁<sup>はら</sup>が孕<sup>はら</sup>む「黒<sup>ブラック</sup>白<sup>・スワン</sup>鳥<sup>の</sup>」の奇<sup>きて</sup>天<sup>れつ</sup>烈<sup>イン</sup>な衝<sup>パクト</sup>撃

『日本経済新聞』2016年3月16日夕刊の「ウォール街ラウンドアップ」欄の、「バフェット氏の賭けの行方」と題する記事(ニューヨーク=佐藤<sup>さとう</sup>大<sup>やまと</sup>和)に曰く、「アメリカンフットボールと大リーグの端境期にあたる3月。米国民は大学バスケットボールに熱狂する。全米各地区を勝ち抜いた68大学が参加する決勝トーナメントが15日始まった。筋金入りのバスケット好きであるオバマ大統領は毎年、優勝予想を発表する。もう1人、この時期にファンの注目を集める意外な人物がいる。著名な投資家ウォーレン・バフェット氏だ。/“トーナメント全試合の勝敗を的中させたら10億<sup>ドル</sup>(約1130億円)。”全米国民を対象にこんなイベントを共催したのが2年前(的中者なし)。参加費無料なので賭博には当たらない。/今年は条件を改め、自身が率いる複合企業パークシャー・ハザウェイとその傘下企業の従業員約30万人に参加権がある。トーナメントの“16強”を正確に当てれば、生涯にわたって毎年100万<sup>ドル</sup>ずつを支給するという。」大統領が趣味の球技の優勝予想を発表するのは米国の個人主義の現れのように思えて成らず、対照的には昭和天皇は日本の<sup>つつ</sup>慎<sup>ひい</sup>まし<sup>き</sup>で<sup>ひい</sup>鼠<sup>き</sup>原<sup>の</sup>相<sup>ひ</sup>撲<sup>けつ</sup>力<sup>と</sup>士<sup>ろ</sup>の名前を決して吐露しなかった。日本長者番付で近年1、2位を争って来た孫正義(ソフトバンクグループ株式会社代表<sup>とりしまりやく</sup>取締役社長・ソフトバンク同会長)はバフェットと同じ慈善活動に熱心な面もあり、11年「3.11」東日本大震災の後100億円の私財を被災者支援と復興支援の為に寄付したが、試合結果の予想に関して全国民に天文<sup>もん</sup>学的な数字の懸賞金を掛ける様な遊び心は見られず、野球の福岡ダイエーホークスと福岡ドームの買収(05)も私的な散財ならぬ企業の投資である。

2016年1月13日の抽選で出た米国宝<sup>たからくじ</sup>籤<sup>い</sup>史上最高額の1等賞金は15億<sup>ドル</sup>強なので、10億<sup>ドル</sup>の懸賞の超巨額と2年連続の<sup>かい</sup>中<sup>む</sup>者<sup>の</sup>皆<sup>い</sup>無<sup>つ</sup>の結果との表裏一体は理<sup>かな</sup>に適<sup>う</sup>。多数参加の競技の勝敗を逐<sup>ちく</sup>一<sup>いち</sup>全<sup>すべ</sup>て当てる事は余程の運が無ければ確率は零に近いし、<sup>よ</sup>実<sup>ほど</sup>力<sup>か</sup>・<sup>か</sup>実<sup>りつ</sup>績<sup>せ</sup>に<sup>せ</sup>由<sup>ろ</sup>る<sup>づ</sup>格<sup>かく</sup>付<sup>づ</sup>け<sup>が</sup>有<sup>あ</sup>っても16強は<sup>サ</sup>順<sup>カ</sup>当<sup>キ</sup>に<sup>キ</sup>時の公定順位の通りに成るとは限らない。囲碁界では<sup>サッカー</sup>蹴<sup>キ</sup>球<sup>キ</sup>・卓球等と違って国際連盟に由る権威有る国・地域や個人の番付は無いが、韓国等の有志者が独自に作成した世界順位での上位棋士も低位者に負ける事が無くはないし、中国棋院が定めた棋士順位の1~16番目も仮に上位256名参加の国内<sup>ト</sup>勝<sup>ナ</sup>ち<sup>メ</sup>抜<sup>ン</sup>き<sup>ト</sup>式<sup>ン</sup>戦<sup>ト</sup>に出る場合、潰<sup>つぶ</sup>し<sup>合</sup>わ<sup>わ</sup>ない<sup>か</sup>様に16区に1人ずつ配置されても俱<sup>とも</sup>に4連勝して16強入りする保証が無い。現に、実績の点数化に基づく順位を年3回(13年より毎月)公表する制度の正式発足の年(1997)に生れた<sup>か</sup>柯<sup>け</sup>潔<sup>つ</sup>は、2010年末(当時二段)の326人中の266位から<sup>す</sup>凄<sup>さ</sup>ま<sup>じ</sup>い<sup>い</sup>勢<sup>い</sup>で15年10月以降の1位に上り詰めた。

共産党第18期中央委員会第1回総会(2012.11.15)で党首(総書記)に当選した習近平も、第15回党大会(1997.9.12~18)で初めて中央入りした時には正式の委員(193人)に成れず、得票順で並べる委員候補(151人)の文字通りの末席(最下位)に在ったので、「10倍返し」という日本のテレビ劇の中の熱血漢の啖呵<sup>5)</sup>は中国では現実に成る事が能く有る。

中国棋院の番付では現役棋士群の下に「不活躍選手」の部類が有り、柯潔が新王者と成った翌月の末では前者の401人に対して226人の上っている。休眠棋士の筆頭である銭宇平(1987年九段昇進)は数々の栄冠・殊勲を有しながら、病気の為に第4回世界選手権富士通杯(91)決勝の不戦敗を転換点に33歳(99)で休業した。2位の実力者劉小光(88年[28歳]に九段)と格が違う90年代の覇者馬曉春は、19歳(83)で九段(中国の4人目、世界最年少)に昇進し世界優勝2回等の実績を持つが、累積点数(2453)が銭の2483、劉の2480よりも少なく7位に甘んじた。彼より2点多く6位に居た華以剛は棋士段位制度発足時(82)の八段で、囲碁協会副主席在任中に棋士番付制と全国囲碁甲級聯賽(総当り戦)の創設(99)を推進し、2007年に中国棋院の3代目の院長に就任し2年後同職の定年(60)で退いた。03年に57歳で2代目院長に成った王汝南は華と同じく生涯の最高成績が国内戦準優勝なのに、初代高段者の中で聶衛平・陳祖徳・呉淞笙九段に次ぐ2人の八段に認定されたが、今や言わば「歴史博物館陳列」陣の24位(2404)に位置し過去の栄光の面影も無い。或る会食の時「王老」と華学明七段(1962~、全国女子優勝2回)の間に柯潔が坐ったが、奔放不羈で人を辟易させ勝ちの彼は王の次に自分の処に置かれたお茶を恭しく華に譲り、其の礼讓精神は王及び15年に国家隊領隊(選手団団長)と成った華を深く感動させた<sup>6)</sup>。「不活躍」56位の彼女の点数は現役陣中120位の聶(2349)より3点下回り125位に相当し、銭も活躍組の41位の李喆六段(2484)と42位の毛睿龍四段(2481)の間に在るが、過去の傑物に対する敬意の別格視と冷厳な「另類」(異種)扱いは中国囲碁の有り形を映し出す。

「選手」の名称と国家体育総局(1998年までは国家体育委員会)の主管で分る様に中国では**囲碁は運動競技の1種**とされ、59~93年の全国運動会(国民体育大会)の種目にも入っており、今だに棋士を「運動員」(体育選手)と扱う場合が散見される。体育の明星として北京5輪(2008.8.8~24)開会式の聖火最終走者李寧を思い起すが、彼が選ばれた理由は中国初参加の夏季5輪(ロサンゼルス、1984.7.28~8.12)での活躍(団体・個人の金3・銀2・銅1の賞牌獲得)等、及び55の少数民族中人口最多(1800万弱)の壮族の出身である事が考えられるが、「体操王子」への朝野の期待は漢城5輪(88.9.17~10.2)での大敗(団体4位、種目別床運動5位)で砕けた。大会後引退した彼は90年に体育用品製造・販売会社「李寧有限公司」を創業し成功したが、経営も中国語で同音(jingying)の「淨贏」(純益[贏利])に成る。専ら贏つは難しい。英語のriskに当る中国語の「風險」は日本語の「危険性」よりも不確かさを感じさせ、風の如く定まらない流動性は世相の栄枯盛衰や人生の悲喜離合だけでなく、体育競技の

中で最も多くの人々を魅せる蹴球とも通底する囲碁の魔力の根源に有る。

2005年3月30日の蹴球<sup>サッカー</sup>世界<sup>ワールド</sup>杯<sup>カップ</sup>亜細<sup>アジヤ</sup>亜<sup>アジヤ</sup>最終予選で日本はバーレーンのオウンゴール<sup>オウンゴール</sup>で辛勝し、ジーコ監督(元伯刺西爾選手)は混戦中自ゴールに球を入れた相手の中盤<sup>ミッド・フィールド</sup>選手に就いて、「懸命に守っているうちに頭が真っ白になり、自分のいる地点を見失ったのだ。サッカーにはよくある。そんな心理状態に追い込んだ日本選手の成果だ」と分析した。脳科学者茂木健一郎(ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー)は、「サッカーは脳に極めて強い負荷を与えるスポーツ。それを象徴するような試合だった」と見て、自らが大好きな人気体育<sup>スポーツ</sup>の蹴球と野球との脳の使い方の大きな違いとして、前者は定型的な試合運びと為る後者に対して、選手に瞬時の判断を迫り続け幾らでも過失を誘う、と語った。『アエラ』週刊誌(朝日新聞社)4月18日号の記事「サッカー脳と野球脳」(編集部 佐藤修史)は此等の論評を引いた上で、刻々と変る状況の連続の中で常に頭を全開にし次の展開を予測する未来思考型の蹴球と、定型的な攻防の中で個人の無意識の力を発揮する上意下達・完全分業型の野球をと比較し、時間制限付きの蹴球はより前頭葉(感情・思考を制御し新しい事物を創造する「脳の中の脳」)を活性化させ、本能・直感を引き出す「動物脳」(小脳)の働きが大きい野球の神髄は集中力に在ると指摘した。囲碁は蹴球の熱・動と対照的な冷・静の特徴を持ちながら脳<sup>かどう</sup>の稼働や戦術眼に類似点が多く、野球で殊に必要な集中力や過去の経験・記憶に基づいて次を占う傾向も兼ね備えるが、双方が交互に1手ずつ打ち合い屢々秒読みに追い込まれる等の極限状態の中で進む囲碁は、「黒馬」(穴馬)の出現が無くても本命・対抗級の王者・強豪の心・技・体の穴に由って、「黒白鳥——奇天烈な衝撃」の大波乱が一瞬にして降り掛る様な意外性を孕んでいる(引用符中の表現はレバノン出身の認識論学者タレブの警世の書[07]の題*The Black Swan: The Impact of the Highly Improbable*の私訳[望月衛訳、ダイヤモンド社09年刊の日本語版の題は『ブラック・スワン——不確実性とリスクの本質』]。ブラック・スワンは1697年に豪太刺利<sup>オーストラリア</sup>で発見された白鳥の略全身が黒色と為る異種「黒鳥」で、同書では金融市場に激甚な打撃を与える想定外の極稀の突発的・破壊的な事象を喩える)。

テレビ視聴者数と経済効果が5輪を遥かに凌ぐ最大の体育盛典である蹴球<sup>サッカー</sup>世界<sup>ワールド</sup>杯<sup>カップ</sup>では、直近の第20回(2014.6.12~7.13、伯刺西爾)を例にしても瞠目の悲喜劇が数々有った。前々回を含む優勝が4回(全参加国中2位)の伊太利は2大会連続で枠抜けが出来ず、前回王者の西班牙も同じ優勝経験1回の英蘭と共に「死の組」の総当り戦で脱落した。優勝経験最多(5回)の開催国は準決勝で独逸(今大会優勝[4回目])に1:7で大敗し、3位決定戦で和蘭(準優勝3回)に0:3で屈し国民の目の前で蹴球王国の面目を失った。16年のリオ5輪(8.5~21)卓球<sup>卓球</sup>亜細<sup>アジヤ</sup>亜<sup>アジヤ</sup>予選(香港)の2日目(4.14)に、半世紀以来の同種目王国の「準女王」と其の前の王国の新鋭との対決が行われた。中国の李曉霞に次ぐ世界2位で12年倫敦5輪準優勝・前年世界選手権優勝の丁寧(25)が、対日個人戦略全勝(対石川佳純10勝0敗、対福原愛6勝1敗)

を収めて来たのに、4勝0敗で圧倒して来た日本の3番手伊藤美誠（15, 世界10位）に2:4で思わぬ苦杯を喫した。予選の成績は出場の当落に直結せず通常の一騎打より真剣度が若干落ちると雖も、長身の相手の弱点と為る胸元辺りへの連打が奏功した攻略法の勝利<sup>7)</sup>は予想を覆す進化である。ラ式蹴球の様な体力差等に由り強い方が勝ち易い種目でも15年の世界杯（英国）では、世界序列13位の日本は優勝経験を2回持つ3位の南アフリカを34:32で下した（9.15）。欧米の賭け屋の倍率が南ア勝利1倍対日本勝利34倍だったから大会史上最大級の番狂わせと言える<sup>8)</sup>が、AlphaGo 挑戦の5番勝負の下馬評は李世石への一辺倒であるだけに劇的な展開に成った。

### IBM への投資・買収に見る米・中の商魂や「民族情感」

5局勝負終了の翌日の『日本経済新聞』夕刊に載った「バフェット氏の賭けの行方」は、前掲の記述に続いて次の様に書いてある。「今月はバークシャーの主要な投資先で“4強（ビッグ・フォー）”とバフェット氏が名づけた銘柄群に材料が相次いだ。大手銀行ウェルズ・ファーゴによるカード大手アメリカン・エクスプレスの買収説が今月初め、株式市場に流れた。バークシャーは両社にそれぞれ9.8%、15.6%出資する筆頭株主。ハードルは極めて高いが、業態を超えた久々のメガ金融再編の可能性が取り沙汰されている。アルコールを口にしないバフェット氏はコーラを1日15缶飲むという。バークシャーが9.3%保有するコカ・コーラ株は今月、過去最高値を1年4カ月ぶりに更新。株式・債券市場に不透明感が漂うなかで、コカ・コーラの業績安定感と積極的な配当方針に着目した買いが入っている。数十年におよぶ長期投資で分厚い含み益が発生している、これら3銘柄と背景が異なるのが、4つめのIBM株だ。IBMへの本格投資を開始したのは2011年とまだ日が浅い。IBMは昨年10~12月期末まで15四半期連続で減収となり事業再構築の途上にある。それでもバフェット氏は自身の“賭け”への自信が揺らがない。昨年末のIBMへの出資比率は8.4%と前年末比0.6%高めた。」バフェットは生活必須度・市場占有率・財務健全度・企業成長性等を銘柄選択の尺度とし、自分に理解できない業種には手を出さない主義から情報技術産業には興味を示さなかった。IBMの創業100周年に本格的に始まった此の世界的な電脳関連大手企業への集中投資は、04年に同社の個人電脳事業部門を買収した中国の聯想集団と似た価値判断を思わせる。

彼の「オマハの賢人」は実力・将来性を見極める上で好い企業の株を良い時機に買い、見込みが外れない限り持ち続ける方針で長期に亘って驚異的な運用成績を上げ続けて来た。第1回サッカー・ワールド・カップ蹴球世界杯（1930.7.13~30, ウルグアイ）の直後（8.30）に生れた彼は、「人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>」の用語が誕生した年に数人の家族・親友から金を集めて投資会社を立ち上げた。60年に相棒の1人に1万ドル以上出資する医師を11人紹介して貰い軍資金を膨らませたが、後に大きな利益を



出すに至った61年の初投資(風車製造会社の株100万ドル分の購入)の後、繊維業のパークシャー社の株を割安と考<sup>わりやす</sup>えて全株式の49%まで買い進み経営権を握<sup>にぎ</sup>った。経営改善の努力は斜陽産業の凋落を喰<sup>ちようらく</sup>い止められず85年に繊維部門の再建を断念したが、古臭<sup>ふるくさ</sup>い屋号を冠<sup>やごう</sup>す新興投資会社として本業の赤字が問題に成<sup>あかじ</sup>らない程<sup>ほど</sup>の巨利を得続けた。65年にパークシャーに1万ドル投資し保有し続けば2006年には其の価値は約3千倍と成り、同期間のS&P500種(米国の代表的な株式指数)の同50倍程度を2桁も上回っていた。ハザウェイ製造会社創業100周年に当る88年からのコカ・コーラ株の大量購入を始め、其の優良株の発掘と長期保有の目利きと根気は世界中の投資家の間で伝説と成っている<sup>9)</sup>。米国発の2000年情報技術泡沫の誘惑に動じない姿勢も逆張りの神髓の様に見えるが、IBM株の買い増しも相応の企業価値と不当な市場評価との乖離に着目した結果に違<sup>かいり</sup>い無い。彼の選好の例として世界占有率6割(売上高基準)の剃刀製造会社ジレットが屢々挙げられ、25億人の男性の髭が刻々と少しずつ伸びていると考えれば(株主として)心地よく眠れる、という諧謔な説明には需要の普遍性と製品の知名度を重視する哲学が凝縮されている。IBM株に対する新規重点投資は電腦社会への順応と同社の名声への敬意も有ろうが、本格化の11年はIBMの人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>開発が歴史の新たな1頁を開いた時期なので興味深い。2月16日に米国の人気試問遊戯番組で其々74連勝した強豪と賞金総額第1の王者に対して、其の質問応答系統Watsonが立て続けに破り最高賞金の100万ドルを獲得した。

2003年春の福建・広東発の「非典型性肺炎」(重症急性呼吸器症候群)の流行によって、中国は世界に怪病を撒き散らす疫病神の如く天安門事件以来の国際的な孤立に陥った。其の中でバフェットは4月に初の中国案件として資源大手の中国石油天然気集団に出資し、全株式の約14%の保有は「神」の御墨付として1999年に創業した同社の声価を高めた。上海証券取引所での上場初日(07.11.5)に時価総額世界1と化する直前の10月下旬までに、彼は平均買値の7倍に当る水準の株価で売り抜け<sup>10)</sup>後の数ヶ月の約4割もの下落を免れた。10月16日に上海証券交易所総合株価指数が同所開業(1990.12.19)後の最高値(6124.04点)に達し、中国本土株式の代表的な指数の此の記録は爾來更新どころか接近さえ無かったので、其の底値買い・天井売りの神業は市場に張り付く回転売買の名手たちにも舌を卷かせた。短篇小説「香港」(『大衆文藝』55年8~11月号)で第34期直木三十五賞(55年下半年)を受賞した台湾出身(80年帰化)の邱永漢は、亡命先で最高の大衆文学賞を得た初の外国人として脚光を浴びた後59年に株式投資を始め、経済成長の波に乗って200万円の元手を1年で25倍に増やし「金儲けの神様」と呼ばれた<sup>11)</sup>。彼が座右の銘とした井原西鶴の「貯金十両、儲け百両、見切り千両、無欲万両」の金言<sup>12)</sup>の3句目は、囲碁の方向転換や逃げ切りとも似た損切りや利益確定という最も高度な技巧を要するが、市場の人気の弱い時に買い強い時に売る逆張りの実践でバフェットは難無く熟した。翌年9月に中国の電気自動車・電池製造会社「比亞迪」(BYD)の

全株式の約1割を取得した事<sup>13)</sup>は、自動車社会に入った中国の環境保護の国策が寄与する利益を見込んだ新展開の布石である。中国石油天然気株で梯子を外された中国の個人投資家は却って彼への畏敬の念を深めたが、勝者への尊崇は占領軍総帥マッカーサーに対する戦後日本の官民の態度と重なる処が有る。バフェットは00年から貧者・浮浪者を救済する基金への支援として毎年慈善昼食会を催し、最大7名同伴 possible の相手に対して自らの保有株と次の投資先以外の質問に全て答える事になっている。権利落札額は発足時の2.5万ドルから03年の25万ドルに暴騰し、06年に匿名者を除く初の中国人(步步高[家電製品会社]の段水平会長)が62万ドルで獲得し、2年後に中国の私募基金「教父」趙丹陽(赤子之心中華成長基金社長)の211万ドルで釣り上げられ、12年の345万6789ドル(権利獲得者は匿名)を経て14年には中華系新加坡人アンディー・チョウが220万ドル、15年には中国の大連天神娛樂公司会長朱擘が235万ドルを出した<sup>14)</sup>から中国・「中国所縁圏」(造語)での人気が高い。

職人的気質の日本人に対して中国人は商人的性格の国民だと言う邱永漢の命題<sup>15)</sup>の通り、IBMの個人電腦事業部門に対する聯想集團の買収は中国的な逞しい商魂を見せた。同集團の前身と為る中国社会科学院(國務院直属の理工系国家最上級研究機關)計算所新技術發展公司是、同院計算機研究所の11人の研究者が20万元(約2千万円)を出資し1984年に設立した会社である。此の「風險企業」は88年以降香港での事業展開・株式上場等に続いて97年に国内PC売り上げ1位と成り、IBMのPC部門を傘下に収めた後出荷数世界3位から2位(2011)、1位(13~)に躍進した。相手の経営難を利用し潤沢な財力で物を言わせて巨人の肩の上に乗って行く手法は、日本の家電大手シャープに対する台湾の鴻海精密工業の買収(16.4.2契約)にも見られる。2つの事例とも当該分野の強豪の一部乃至全体を支配する商売上の達成感と共に、國際關係に於ける現在の2強競合や過去の宗主国対殖民地に絡んだ民族的な快感も伴う。音楽家・映画製作者高曉松は13年に『曉松說——歷史上的今天』(曉松語る——歷史上的今日)を題に、上海の東方衛視(東方衛星電視台)の「脫口秀」(talk show [有名人・芸人等のお喋りを楽しむ興行])の音訳兼意識。「脫口」[tuōkǒu]は軽口や当意即妙等の意が有り、「秀」[xiù]は優れた者の形象を持つ)を担当した。4月24日の分では1898年の米西戦争勃発、1918年の人類史上初の戦車遭遇戦、バーブラ・ストライサンド(米国の歌手・女優・作曲家・映画監督、42~)の誕生日)に続く最後の話題は、「推動人類發展的个人電腦」(人類の發展を推進した個人用電腦)である<sup>16)</sup>。彼は81年の此の日IBMが最初の個人用電腦を世に出した事の歴史的な意義を絶賛した上で、米国の誉れ高いIBMのPC部門が中国の栄光有る聯想集團に売られた事を誇らしく語った。

米国在住の高は当時買収の責任者を務める技師(清華大学の同級生)と紐育で会った時、接收したら真っ先に日本人幹部・従業員を全員誅首にして遣ると軽口を叩かれた。米国ではこれは人種差別に当り巨額の損害賠償を強いられる違法行為だよと注意すると、「我只是開句玩

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方(1)(夏剛・夏冰)

笑、但我内心深处是有這個願望的」(僕は只冗談を言ったただけだ。但し心の奥底にはこういう願望が有るんだ)と言われた。1969年生れの彼の学友が日中戦争終結60周年に当る其の頃は35歳と推定されるが、其の親も多分日本軍から直接加害された体験が無いであろうから怨念の吐露は未<sup>すえ</sup>恐ろしい。高は世界で最も市場経済に適<sup>こ</sup>応し此の種の「壁壘」(障壁)意識が滅多に無い米国人民を讃え、米国で販売される中国の個人用<sup>パーソナル</sup>電腦や日本の自動車が米国で製造されている事を挙げて、韓<sup>サムスン</sup>国の三星の製品を国際的な銘柄と捉える米国流の地球的な規模の感覚を持つよう勧めた。其<sup>こ</sup>処で触れた「民族情感」の問題は10月24日の「中国棋院成立」(91)の話<sup>17)</sup>にも出ており、一衣帯水の近隣関係に在中・日・韓3カ国は「仇」(遺恨)も絡んで長年来張り合い続け、其の競争は各々の「民族性格」(国民性)を反映し愛国心を發揮する囲碁で爆発したと言う。彼は聶衛平・李昌鎬が中・韓で「民族英雄」とされた往年の熱が娯楽の多様化に由<sup>おとろ</sup>って衰え、中国で発祥し日本で継承された囲碁の求道精神が体育競技化の為に変質した事を残念がった。王汝南と親しく馬曉春と組んで2人制碁をした事が有る愛好者の高は其の前の2月10日、「深藍」落敗国際象棋大師卡斯帕羅夫(Kasparov) (Deep Blue)が西洋将棋巨匠カスパロフに敗北)と題する1話<sup>18)</sup>で、IBMの計算機開発の成果から電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup>智能化の加速を論い囲碁の高段棋士に挑む可能性を予測した。

1996年の此の日、IBMが開発した電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup> Deep Blue が世界で最も著名な西洋将棋の巨匠カスパロフと対戦し、2月17日に最終的に2:4で敗北しました。科学技術の不断なる進歩に伴って、電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup>は益々智能化して来ました。1996年から今まで僅か十数年の間に、計算機は猪突猛進の速度で発展して来ています。私が清華大学で勉強していた頃、其の大学の一番小さい電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup>でも大きさが部屋の半分ぐらいでした。後に私が持った最初の電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup>はCommodoreという名前ですが、今や此の銘柄はもう存在しません。当時はとても値段が高く、1台で3万円余りもしました。ところが、内部記憶用装置はたったの64KBでした。皆さんは今の感覚で考えて下さい。64KBでは何が出来ますか。何も出来ませんよね。電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup>が急速に飛躍する時には、人間の脳は付いて行けなく成りました。又其の果てには、もう電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup>に勝てる人間が居なく成りました。

西洋将棋は規則が非常に複雑な競技です。実は物事は規則が複雑な程電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup>に把握され易い、と個人的に思います。な<sup>な</sup>ぜなら、規則が複雑であれば電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup>は此れを分析できるが、規則が簡単であればある程、人間対人間の判断に因<sup>よ</sup>って来るからです。囲碁が世界で規則が最も簡単な「棋」(碁と西洋将棋等の盤上遊技の総称)です。黒・白の2種類の石が有り、4方に囲まれば石が取られて了<sup>しま</sup>う、というひとことつきます。こんなに簡単な規則の下で、如何なる電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup>も囲碁の強豪に太刀打ちできません。下手な碁打ちにすら対抗できません。私が其の下手な方ですが、電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup>は私には勝てません。然し人間が相手なら、誰でも私に勝てます。電<sup>コン</sup>腦<sup>ピュータ</sup>は仮令偶に私に勝てるとしても、九段の強豪には勝てません。何故かと言いますと、九段の強豪が碁を打つ場合は、最早簡単な規則と計算で済む事ではなく、「道」

という非常に高次元の問題を含む様に成るのです。此れが人間と動物、人間と<sup>コンピュータ</sup>電脳、人間と機械との違いです。西洋将棋はとても複雑で、中国象棋も同様に、<sup>ルール</sup>規矩が色々有ります。規矩が多いと、要する<sup>しゅ</sup>主として計算を頼りにして<sup>しま</sup>います。こうすれば、人間は<sup>コンピュータ</sup>電脳に敵わなく成ります。但し、<sup>たば</sup>囲碁では今も、そして私の予測に拠れば、未来に至っても、<sup>コンピュータ</sup>電脳は人類に勝てる訳が有りません。

## 碁の黒・白の対立・統合に似た中国や情報化社会の二面性

高曉松が「好莱坞の常青樹」(ハリウッドの常緑樹)と礼賛した「芭芭拉・史翠珊」は2003年、<sup>カリフォルニア</sup>加州の海岸線浸蝕を防ぐ為に海岸線の航空写真を<sup>ネット</sup>電脳網で公開した団体に対して訴訟を起し、自分の豪邸が写っている故私生活の秘密を侵害されたとして公開差し止めと損害賠償を求めた。敗訴と成った騒動は忽ち問題写真への<sup>アクセス</sup>接続殺到を招き「ストライサンド効果」が生じたが、この新語は<sup>リスク</sup>情報化社会の利便性・危険性や攻撃的な行動の成功・失敗の隣り合せを示唆する。国際社会でも人間社会でも<sup>バッシング</sup>糾弾されるより<sup>バッシング</sup>無視される方が辛い場合は少なくないが、<sup>ネット</sup>電脳網は往々にして注目を集めた結果が「炎上」で素通りにされた方が却って有り難い。『広辞苑』では第4版(1991)から「バッシング【bashing】」の項目が設けられた(語釈の「強く叩くこと。手きびしくやっつけること」の後半の動詞は現行版から「非難する」に変更された)が、世界に於ける日本の風当りの強さを窺わせる用例の「ジャパン——」は印象的である。<sup>ナショナル・プライド</sup>民族自尊心の高い中国では<sup>マイナス</sup>自国の負の<sup>イメージ</sup>形象を排除する<sup>けんちやう</sup>姿勢が顕著で、「威脅」(脅威)の用例に域外で盛んに言われる「中国××論」を盛り込む様な真似が有り得ない。米国の社会学者ボーゲル著『世界一の日本——米国への教訓』(Japan as Number One: Lessons for America, 79)の様な日本への高い評価も、「出る杭は打たれる」と言う通りの日本敲きの一因と考えられる。曾て藤沢秀行(名前の通称読み = 「しゅうこう」)・坂田栄男等の碁を熱心に勉強して棋力を伸ばして来た中国の<sup>バッシング</sup>囲碁界では、今や<sup>バッシング</sup>追い越しの<sup>バッシング</sup>達成感・優越感からか同時代日本の棋譜を並べる棋士が可也減っている。中国語の「打譜」(棋譜を並べる)と「敲/拍子」(碁石を強く<sup>たた</sup>敲く様に置く)は、元は太鼓・銅鑼等を<sup>たた</sup>敲くことに<sup>しった</sup>言い叱咤等の意で<sup>バッシング</sup>bashingにも対応する「敲打」の2字を含む。此の2語は碁打ちの手付きの力強さと<sup>ちからづよ</sup>中国の<sup>バッシング</sup>碁の<sup>バッシング</sup>気迫を思わせる妙味も有るが、新しい世代の棋士は「打譜」よりも「敲鍵盤」(「<sup>パーソナル</sup>個人用<sup>パソコン</sup>電脳」の<sup>キーボード</sup>鍵盤を<sup>たた</sup>敲くこと)が多い。碁の<sup>バッシング</sup>情報発信・保管や対局の場と成っている<sup>ネット</sup>電脳網の「<sup>バッシング</sup>敲打」の<sup>はんぱ</sup>攻撃性も半端ではなく、例えば「高曉松」で検索すれば上位に「中国の音楽家・高曉松、危険運転で懲役6ヵ月、罰金4千円」が出て来る。国営の中国新聞社の此の報道(2011.5.17)には<sup>しんが</sup>法廷警察が彼に<sup>てじやう</sup>手錠を掛ける写真も有るから、日本で見られない<sup>しんが</sup>重罰と人権侵害は辛亥革命100周年(同年10.10)の中国の現実である。高は5月9日に北京で飲酒・無免許運転に由って玉突き事故を起して4人に<sup>けが</sup>怪我させ、飲酒運転の罪と罰を盛り込んだ「刑法修正案(8)」

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方(1)(夏剛・夏冰)

の実施(5.1)後の著名人適応第1号と成った。米国の<sup>パスポート</sup>旅券を示したものの中国の公民身分証を保有した為に自国民として<sup>さば</sup>裁かれた事件は、多くの新聞の1面を<sup>にぎわ</sup>賑し<sup>ネット</sup>電脳網<sup>上</sup>でも不名誉な記録が半永久的に残されて行くであろう。

2015年7月に<sup>アリババグループ</sup>阿里巴巴集団が設立した音楽集団の理事長に就任した報道も上位に見えるので、**基石の黒・白の対立・統合を連想する中国の社会・人間の二面性の混在・調和**が感じられる。「アリババと40人の盗賊」の話から名前を取った中国最大級の情報技術企業は創業(1999)以来、「<sup>ごま</sup>胡麻」の<sup>じゆもん</sup>呪文を唱えるだけで財宝を手に入れる様な魔法で<sup>つぎつぎ</sup>次々と大成功を積み上げた。創業者の<sup>ジャック・マー</sup>馬雲は英語教師・翻訳会社経営を経て95年の訪米で<sup>インターネット</sup>国際電脳網に開眼し、帰国後情報蓄積電脳系統「中国<sup>イエロー・ページ</sup>黄頁」の設立・運用で資金を蓄えて起業に至った。彼は売り上げが無に等しく赤字だった2000年に孫正義と面談する機会を得て、持ち時間10分の半分で事業概要・抱負を熱っぽく語った処で20億円の<sup>提示</sup>出資を提示された。約20社の情報産業新興企業経営者との個別面談で馬の目の輝きで決めた<sup>きゆうかく</sup>動物的な嗅覚は、同社の紐証券取引所上場(14.9.19)で筆頭株主の孫に出資金の約4千倍の<sup>もたら</sup>含み益を<sup>もたら</sup>齎した<sup>19)</sup>。「アリババと40人の盗賊」の由来とされる<sup>アラビアン・ナイト</sup>印度・イラン起源や中東諸地方の物語『千夜一夜物語』は、中国語では『一千零一夜』又は『天方夜譚』と訳され、<sup>きょうむ</sup>後者の題は<sup>こうとうむけい</sup>転じて<sup>きょうむ</sup>虚妄・<sup>こうとうむけい</sup>荒唐無稽の言説に喩えて言う。米国留学中の1979年にシャープに自動翻訳機を売り込んで得た1億円で81年に起業した孫も、<sup>ほらふ</sup>法螺吹きと思われる<sup>あおじゃしん</sup>勇壮な<sup>あおじゃしん</sup>青写真で一種の投資会社と化した企業集団を大きく発展させた。彼は2014年に破格の待遇(半年で165億円の<sup>ほうしゅう</sup>契約金・<sup>いんど</sup>報酬支給)で<sup>いんど</sup>印度出身の<sup>ビジネス</sup>グーグル上級副社長兼最高事業責任者アローラを迎え、翌年5、6月に副社長等に据え<sup>後継者</sup>の筆頭候補という位置付けを明言した<sup>20)</sup>。孫は10月22日のソフトバンクアカデミア特別講義で「Singularity~情報革命が導く世界~」の題で<sup>そ</sup>講演し、<sup>グループ</sup>其の中で自集団が注力している<sup>A</sup>人工<sup>I</sup>智能・<sup>スマートロボット</sup>智能<sup>L</sup>機器<sup>0</sup>人(中国語の表記)・<sup>コンピュ</sup>物の<sup>タ</sup>電<sup>ット</sup>網の有り<sup>かた</sup>形に即して、<sup>コンピュ</sup>人間・<sup>電</sup>脳<sup>ット</sup>の能力の類似点と為る<sup>シンギュラリティ</sup>技術的な<sup>コンピュ</sup>特異性を<sup>クロス・ポイント</sup>解説し、<sup>コンピュ</sup>電<sup>ット</sup>脳が<sup>コンピュ</sup>人<sup>ット</sup>智<sup>ット</sup>を超<sup>ット</sup>える<sup>クロス・ポイント</sup>交差点が30年以内に到来するとの予想や「情報革命で人々を幸せに」の経営理念、上記3分野の進化に由る<sup>コンピュ</sup>人類と<sup>きょうぜん</sup>知的な<sup>コンピュ</sup>電<sup>ット</sup>脳が<sup>きょうぜん</sup>共存する<sup>コンピュ</sup>近<sup>ット</sup>未<sup>ット</sup>来<sup>ット</sup>の世界像に就いて<sup>ロ</sup>力<sup>ット</sup>説した<sup>ていけい</sup>21)。<sup>ロ</sup>鴻海精密工業と<sup>ロボット</sup>機器<sup>ていけい</sup>人量産で提携した事<sup>22)</sup>も含めてパフェットのIBM株投資と重なるが、元グーグル幹部の<sup>い</sup>印度人に対する<sup>か</sup>型<sup>い</sup>破<sup>か</sup>りの重用は<sup>い</sup>如何にも<sup>い</sup>在<sup>い</sup>日<sup>い</sup>韓<sup>い</sup>国<sup>い</sup>人<sup>い</sup>出身の孫らしい。国際人の彼に認められた<sup>だいしゅつせ</sup>馬雲の大出世や馬に買われた高曉松の「<sup>かっかつ</sup>敗者復活」を考えれば、<sup>お</sup>米<sup>お</sup>国<sup>お</sup>と<sup>お</sup>同<sup>お</sup>じ<sup>お</sup>人<sup>お</sup>種<sup>お</sup>・<sup>お</sup>民<sup>お</sup>族<sup>お</sup>の<sup>お</sup>坩<sup>お</sup>堝<sup>お</sup>の<sup>お</sup>観<sup>お</sup>が<sup>お</sup>有<sup>お</sup>る<sup>お</sup>中<sup>お</sup>国<sup>お</sup>及<sup>お</sup>び<sup>お</sup>中<sup>お</sup>国<sup>お</sup>人<sup>お</sup>の<sup>お</sup>鷹<sup>お</sup>揚<sup>お</sup>さ<sup>お</sup>・<sup>お</sup>強<sup>お</sup>か<sup>お</sup>さ<sup>お</sup>が<sup>お</sup>又<sup>お</sup>垣<sup>お</sup>間<sup>お</sup>見<sup>お</sup>える。

高曉松は6ヵ月の<sup>こうりゅう</sup>拘留を終えた11月8日に<sup>しゅつしよ</sup>出所後直ちに<sup>ただ</sup>定住・<sup>ただ</sup>帰化先の米国に帰ったが、翌年3月15日から2014年5月30日まで<sup>サ</sup>動画共有情報蓄積電脳系統「<sup>Youku</sup>优酷網」の「<sup>トーク・ショー</sup>脱口秀」の演出・司会を務めた。作家韓寒が「小説」と同音・同声調(xiǎoshuō)の『<sup>だ</sup>曉説』で命名した<sup>こ</sup>此の番組は、古今・東西の歴史・人物・社会・文化等を紹介し<sup>こ</sup>独演や座談の形式で週1回放

送され、最も人気を博した「東瀛日本」全9話だけでも視聴5200万回・論評5万件を記録した<sup>23)</sup>。1994年に「校園民謡」で流行音楽の寵児と成った高は「百科全書的な才子」の定評も有り、「車禍」(自動車事故)に由る逮捕・禁錮歴は些かも才能発揮の妨げに成らなかった。「黒い猫でも白い猫でも、鼠が捕れる猫が好い猫だ」という現実主義者鄧小平の名言の通り、中国では欠陥や汚点の有る異端者も抜群の異才の持主なら尊敬を博し喝采を浴びる事が多い。馬雲は2回の大学受験で数学が1点、19点(100点満点)しか取れず3回目(同79点)漸く受かり、韓寒も第1回新概念作文競作大賞受賞の1999年に数科目の落第で高校1年を中退したが、翌年に長篇小説『三重門』(作家出版社)を刊行し累積部数が史上最多級の約500万に達している(平坂仁志訳、サンマーク2002年刊の日本語版の訳題は『上海ビート』)。彼は最も影響度の高い同時代の作家として電腦網で自作や雑誌の刊行・発売を試みる一方、「博客」(blog)の音訳兼「訪問者を博す」願望を込めた意識)で尖鋭な世相批評を行い続け、2000年代後半の年間アクセス数が共産党員数の8千万台に迫り一大社会現象と成っている。職業選手として自動車競走に出る等の野性的な行動で話題を呼ぶ点でも稀有の存在である<sup>24)</sup>が、12年ユーキャン新語・流行語大賞に選ばれた「ワイルドだろお」の中国語訳「(我) 够狂野吧」に因んで言えば、此の種の「狂」(生意気)・「野」の個性的・意欲的・行動的な人間は中国では巨万と居る。

「吹けば飛ぶような将棋の駒に/賭けた命を 笑えば笑え/うまれ浪花の 八百八橋/月も知ってる 俺らの意気地。」此を第1段落とする演歌「王将」(1961)は戦後初と言われる発売100万枚達成と成り、作詞者西條八十・作曲者船村徹・歌手村田英雄は日本将棋連盟から名誉初段を授与された。48年/62年版同名映画(大映/東映、伊藤大輔監督、阪東妻三郎/三國連太郎主演)と同様、大阪を拠点に活躍した「無法者」棋士阪田三吉(1870~1946)が原型と為る内容である。「三・吉・馬」以外の字を知らないと言う彼は「関西名人」と自称する実力を独習で身に付け、歿後王将位・名人位を追贈された此の孤高な苦闘は妻の献身的な支えと1対の伝説に成る。「あの手この手の 思案を胸に/破れ長屋で 今年も暮れた/愚痴も言わずに 女房の小春/作る笑顔が いやらしい」という2段落目は、上方落語界の大明星初代桂春団治(1878~1934)と陰で支えたお浜との夫婦愛を謳う、演歌「浪花恋しぐれ」(たかたかし作詞、岡千秋作曲、83)の中の男・女の科白を思い起す。「そりゃ わいはアホや/酒も呷るし 女も泣かず/せやかて それもこれも みんな芸のためや/今に見てみい わいは日本一になったるんや/日本一やで/わかってるやろ お浜/なんや そのしんき臭い顔は/酒や! 酒や! 酒買うてこい!」「好きおうて 一緒になった仲やない/あんた 遊びなはれ 酒も飲みなはれ/あんたが日本一の落語家になるためやったら/うちは どんな苦勞にも耐えてみせます」藤沢モト著『勝負師の妻——囲碁棋士・藤沢秀行との五十年』(角川書店、2003)、『大丈夫、死ぬまで生きる 碁打ち 藤沢秀行——無頼の最期』(同、12)で綴られた様に、夫の博打・借金・婚外恋愛・出奔・癌闘病の難局に59年間も耐え抜いた良妻が囲碁界に居る。

「そんな八方破れな人生みたいな秀行棋士が意外に世間の人気を呼び、人々は“一年を四勝で暮す好い男”などともてはやし、奇異の眼で眺めた」、と中山典之(職業六段)は『昭和囲碁風雲録』(岩波書店, 2003)の中で書いている<sup>25)</sup>。妻及び4人の愛人との間に3人ずつ子供を儲け正月に全員が一堂に会して藤沢夫妻に挨拶し、<sup>それ</sup>其を見た将棋永世棋聖の米長邦雄九段が「オレとはエライ違いだ。恐れ入りました」と頭を下げた、<sup>つちだまさみつ</sup>という土田正光九段が伝聞として語った「怪物伝説」<sup>26)</sup>は夫人の回想録には見当たらない。上記2冊の后者には、亡夫の「病気みたいな」<sup>うわき</sup>浮気の相手は自分が判明しているだけでも10人は下らず、「(中野)の人と〈江古田〉の人との間にそれぞれ子どもが二人ずつ生まれ」、「子どもを産まなかった人が四人」居たと有る<sup>27)</sup>が、前者では刊行時に存命中の夫の同調を得た憤懣の出入り禁止宣言として、愛人の「江古田」(居住地に因んだ呼称)には2度と家の敷居を跨がせないと書いてある。他方、秀行の胃痛手術(1983)後の静養が契機で同じく彼の子を産み育てている「中野」(同)は、夫婦を<sup>まじ</sup>交えて3人で<sup>いっしょ</sup>一緒に温泉に行ったり本宅に来て食事・宿泊したりする様に至った。施術病院の医者<sup>の</sup>家族(夫妻・子供・母親)と同行した初回は<sup>えこひいき</sup>依怙鼻<sup>に</sup>成らないという理屈である<sup>28)</sup>が、世間から見れば「悪平等」として絶句する様な神経は当人には通常<sup>の</sup>感覚かも知れない。盤外の豪快・放恣・奇行乃至不覚・破綻と盤上の豪胆・奔放・奇手乃至錯乱・自滅の両面は、秀行流のみならず棋風と人柄との相関の有無・濃淡を探る興味津々の研究材料に為ろう。

大阪船場出身の社会派小説の旗手山崎豊子は長篇『華麗なる一族』(新潮社, 1973)の中で、「小が大を喰う」<sup>どんべい たくら</sup>呑併を企む阪神銀行頭取万俵大介の妻妾同居の生態を描いている。念願の合併が実った後執事兼情婦に手切れ金を払って追い出す身辺整理が物語っている様に、<sup>フィクション</sup>虚構の建前で設定された此の種の乱脈は地位・名誉の有る現代人の場合には許されない。『週刊ポスト』(小学館)2016年5月27日号に見える初代桂春団治の事へと連想が飛ぶが、巻頭特集「日本史上最強の“性豪”は誰だ」の中の16位として彼の「元祖・破天荒芸人」が登場し、2代目の証言や『サンデー毎日』(毎日新聞社)1951年8月5日号の報道を引用する形で、7人の女を囲み毎晩妻を含む8人を集合させて皆の前で夜の相手を指名したと書かれている。「正に“芸のためなら女房も泣かず”を地で行っていた」と結んだ記述の真偽はともかく、「破滅型」の評も有る彼の「不純異性交遊」等の私生活を正当化する演歌への世人の共鳴は、天下制覇の夢・実力を持つ芸道等の逸材は略無条件で尊ばれるという価値観を思わせる。脚色された猟奇的な珍聞でなければ藤沢秀行の場合と通じる平和的な共存に注目したいが、馬雲より1歳年上(63~)の小説家蘇童の「妻妾成群」(妻妾群れを成す)が思い起される。作中の富豪陳佐千の正妻と第2、第3、第4夫人は同じ屋敷に住み食事と一緒にさせられるが、毎晩4人が招集され執事から旦那様<sup>だんなさま</sup>に由る同衾者<sup>どうきん</sup>の指名を受けるといふ陳家の仕来りから、中国の権力闘争を彷彿させる陰湿な嫉妬と熾烈な対抗が繰り広げられ惨劇に発展して<sup>しま</sup>う。

天安門事件の年に発表された此の中篇は2年後に大陸・香港の合作で映画化され(倪震脚本、

『大紅灯笼高高掛』[真つ赤な灯笼が高々と掛る]に改題、日本語版[1992年東宝東和配給、字幕=松浦美奈]題は『紅夢』、米国映画芸術科学学士院賞外国優秀映画候補指名等の好評を得た。監督の張芸謀は中国映画の第一人者として北京5輪開会式の演出総監督をも務めたが、国の「独り子政策」に違反して妻との間に入籍前に子供を3人作った事で748万円の罰金を科された(処分決定が下った2014年1月9日の為替相場では約1億3千万円)。又4人の隠し子が居るといふ疑惑も浮上し電腦網で「墮落」等の批判が涌いたにも関わらず、同年5月に公開された新作『帰来』(日本語版[15年ギャガ配給、字幕=水野衛子]訳題=『妻への家路』)は文芸映画の売り上げの最高記録を更新した。1980年代の「影后」(映画皇后)と言われる劉曉慶も90年(39)に会社経営へ転身した後、脱税容疑で422日(2002.6.20~03.8.16)に及ぶ獄中生活を強いられたが、保釈の翌年から多数のテレビ劇・映画等に出演し大衆の愛顧を失わず寧ろ同情の声が多い。鄧麗君が1979年来日の際に旅券法違反で国外退去処分を受けたのも名誉な事ではないが、政治的に対立する中国本土も含む東亜細亜全域での超級歌姫の輝きを全く損ねていない。儒教の「三達徳」(3つの普遍的な徳目)の「智仁勇」の順位や天・地・人「三才」と結び付ければ、仁徳より才智を重んじる価値観が読み取れ善悪とは別に達人を尊ぶ傾向も関係して来る。

## 中国の人・文化の複合性格と中・日の言語・発想の違い

高曉松は北京出身で母校清華大学(両親が教授を務めた中国の理工系最高学府)も首都に在るが、其の人格形成と出世・活躍の地で軽率な挙動で重い代償を払わされたのは皮肉な事である。「对不起!永不要酒駕!」(済みません!飲酒運転は永遠にしません!)という自筆の謝罪文も、署名・日付(取り調べ中の2011.5.10)付きの写真が媒体によって電腦網で晒されているが、北京脱出後電腦網や上海の衛星放送の「脱口秀」で新天地を得た事も興味深い巡り合せである。彼は06年に友人の陸川(映画監督・男優)と父親陸天明(小説家)に対する韓寒の酷評に立腹し、『三重門』で自分が1991年に作詞・作曲した「青春無悔」(青春に悔い無し)の歌詞が無断で全文引用された事を蒸し返して、書籍の回収と自作の削除を求めた上で起訴の用意を宣言し韓寒との「博客舌戦」を展開した<sup>29)</sup>。有耶無耶に終わった此の1件の6年後に巡り巡って相手の命名による「曉説」で復活した事は、きつい故に直ぐ発散し2日酔いしない中国の「白酒」(蒸留酒)の様な爽快さを感じさせる。続いて韓の本拠地に在る東方衛視で365日の談論風発が出来たのも奇縁・快挙と言えるが、楊東平著『城市季風——北京和上海の変遷と対峙』(都市の季節風——北京と上海の変遷と対峙。東方出版社、94[日本語版=趙宏偉・青木まさこ編訳、日本放送出版協会97年刊『北京人と上海人——攻防と葛藤の20世紀』])にも見える様な、政治の中心を為す数百年の古都と経済の枢要を占める国内最大の国際都市との対極



囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方(1)(夏剛・夏冰)

構図が面白い。北京生れの高曉松は祖籍(父親の生地。「原籍」とも)が浙江省の省都杭州<sup>せつこう</sup>であり、杭州生れの馬雲の祖籍は同年齢(64.9.10と8.26)の馬曉春と同じ同省の嵯州<sup>じょう</sup>である。高は幼年時代に上海で暮<sup>くら</sup>した経歴から韓寒との地縁文化的な連帯感(造語)も少し有ろう。浙江と上海は古今中国囲碁の聖地<sup>ムツカ</sup>で今も職業棋士の人数・総段位が国内最上級に入るの<sup>プロ</sup>ので、彼の歴史談義・社会世評に囲碁が好く出たのは学者家庭出身の教養人の嗜<sup>たしな</sup>みに相応しいし、囲碁の発祥地の江南と統率機構所在地の北京との複合性格の発露とも見受けられる。

2013年放送の『曉松説——歴史的今天』は翌年から『魚羊野史』の題で書籍化され、[長沙]湖南文芸出版社、民主与建設出版社、[広州]広東人民出版社に由って、其々第1・2巻(14.3.27・8.10)、第3巻(15.4.19)、第4・5巻(同8.25・16.1.1)が刊された。説明が無い書名の中の「魚羊」は古来の美食の代表格として「鮮」(旨味<sup>うまみ</sup>)の字を合成し、両方とも腥<sup>なまぐさ</sup>さを美味<sup>おい</sup>しさに変える料理法が中国文化の「俗・野→雅・美」の昇華と通じる。中国語の「鮮」は「新鮮」の意の他に日本語の「旬」に当る「時鮮」の構成要素でもあり、藤沢秀行の「初物食い」(首相杯争奪高段者勝ち抜き戦、日本棋院第1位決定戦、旧名人戦、早碁選手権、天元戦、棋聖戦で第1期優勝を取めた[1957、59、62、69、75、77]故の綽名)も、「嘗鮮」(「嘗」は「味見する」「味わう」「経験する」の多義)の言い方で表す。在野の者が歴史の断片を「狂野」の味付けで料理する私説の系列の本の表紙に、「歴史有る時は故事/有る時は事故/歴史は鏡ではなく/咲いては又散る花なのだ」と書いてある。「故事」を逆様にした「事故」は前科を意識した照れ隠し(中国語=「遮羞」)と言うより、釈放後に飲酒運転禁止の為の公益宣伝の撮影に協力し襪を済ませた故の開き直りと見て能い。過去の躓きを話の材料としたのなら自虐(中国語では自ら傷付ける意の「自残」)ではなく、商人気質の強い中国人に可く見られる「転んでも只では起きない」欲の深さの為であろう。

同書の刊行地と為る湖南・広州の省都の間で2013年に起きた事件を引き合いに出すが、10月18、19日に『新快報』の陳永洲記者(27)が本社所在地の広州で長沙公安局に連行・拘束された事態を受けて、23日の同紙(日刊)1面に「請放人」(請う釈放)という大きな活字の題で抗議記事が出た。当該記者は大手建設機械製造会社「中聯重科」の經理上の不正疑惑等を1年来数回報道し、同社が名誉棄損の虚偽報道として地元の長沙公安局に訴えた結果此の拘束が敢行された。両省は接壤しているとは言え両市の距離は略横浜～岡山間に相当する550<sup>キロ</sup>も有るから、越境捕捉の「千里走単騎」(単騎千里を走る)は制度的にも物理的にも異様な措置である。法治国家の日本では警察は各自の管轄権を踏み越えた捜査が通常出来ない事と為っており、故に其の縄張りの壁を悪用して県境附近で犯行し隣県へ逃げ込む知能犯も後を絶たない<sup>30)</sup>。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」と川端康成は長篇小説『雪国』(1935～47)の冒頭で書いたが、其の群馬と新潟の県警は幾ら近くとも隧道の向うの事には相手の了

解が無い限り手を出せない。長沙の警察が他省で記者を拉致したのは非法治国家でも幾重にも社会の通念に反しており、『新快報』の2日連続の釈放要請は異常事態に対する異例の抗議に他ならない。暴挙是正の要求を真正面から当局に突き付ける驚天動地の呐喊は日本でも大々的に報じられ、『読売新聞』24日の記事（広州＝吉田健一）には件の紙面の写真も掲載され、「1面に“釈放してください”と大見出しを掲げ、記者の拘束に抗議する23日付の『新快報』という説明も付いている。目を凝らせば超弩級の迫力の全段抜き大見出し（中国流＝「通欄標題」）の下の副題も見えるが、其の「弊社雖小、窮骨頭、還是有那麼兩根的」（弊社は小さいと雖も、弱者の硬骨は多少なりとも有る）は、「請放人」の大鈿に対して頂門の一針の様な痛烈さを持ち報道人の真骨頂を見せている。

『日本国語大辞典』にも「こっとう【骨頭】」の項が見られ、「(《名》) ① 関節の骨。骨のふし。② 物事に屈しない強い心。気骨」の両義に、其々「\* 謡曲・歌占（1432頃）“次の火盆地獄は、頭に火炎を戴けば、はくせきの骨頭より、炎々たる火を出だす” \* 浄瑠璃・平家女護鳥（1719）四“五体にほのほをいただければ百節の骨頭（コットウ）爛々々燃えあがり”」「\* 日本の下層社会（1899）〈横山源之助〉四・二・七“即ち職人は〈略〉互に相下ることをせずして各々見識を保ち、深く職人の骨頭を存せり” \* 思出の記（1900-01）「徳富蘆花）三・一八“死に至るまで志士の骨頭を維持し”」という用例が有る。何れも漢籍出典が無く和製漢語であるかの様な印象を与えているが、『漢語大辞典』（12巻、上海辞書出版社、1986～93）では俱に古い出典が有る。21世紀の初頭に出た『日本国語大辞典』第2版では此の種の誤認は枚挙に暇が無いが、最新の中国最大規模の類書を参照しなかった所も有るとするなら、其の頃の日本の多くの分野で散見された中国研究の不足乃至中国軽視と結び付けたく成る。中国囲碁の躍進と時期が重なる『漢語大辞典』は現代の文例では粗末さが目立つが、古典の部分が十分に『日本国語大辞典』の補完に成り得るので悔まれる。『広辞苑』では其の直ぐ前の「骨頭」の扱いにも成らず廃棄対象の方に仕分けられたが、日本語は中国語から吸収した処が多いのに現代では其の伝統に対する「断・捨・離」も激しい。和文用例の①の燃焼・受難や②の職人根性・志士 俠気の内容に即して深読みをするなら、此の言葉の死語化は図らずも昨今の日本の平和・穩便の微温湯に適した帰結とも思われる。

中国語の「骨頭」は人・動物の骨の他に人間の品性・面相・出自や言説の刺を表す多義を持ち、人の質に使う例として侮蔑語の「懶骨頭」（怠け者）と褒め詞の「硬骨頭」（硬骨漢）が有る。貧しい宿命を背負う人を貶す「窮骨頭」は貧者を軽んじる中国では曾て罵倒語に用いられ、熟語の「笑貧不笑娼」（貧乏人を嘲笑っても娼婦を嘲笑わない）と照らしても実にきつい。世論の同情を集め先方の譲歩を勝ち取る為に敢えて被害を強調する自虐は高等戦術であり、清の曾國藩の家訓にも「撑起兩根窮骨頭」（2本の「窮骨頭」で保つ）と有るから、彼の湘（湖南）軍総帥（1811～72）の故郷の問題企業・警察当局には余計に辛辣である。湖南料理の激辛の特

色と愛用の食材から「山<sup>さん</sup>椒<sup>しょう</sup>は小粒<sup>こ</sup>でもぴりりと辛い<sup>から</sup>」が連想されるが、体が小柄でも鋭い気性や優れた才能を持って侮<sup>あなど</sup>れないの<sup>こ</sup>に言う日本の熟語は、演説で155<sup>センチ</sup>の身長を披露して笑を取る豪快な湖南人<sup>こようほう</sup>胡耀邦<sup>こ</sup> (1981.6~87.1の党首)<sup>31)</sup>や、故里<sup>ふるさと</sup>の超<sup>こ</sup>辛い<sup>から</sup>四川料理<sup>しんめんもく</sup>を好み短身<sup>たんしん</sup> (150<sup>センチ</sup>台後半)に劣等感<sup>りやくとうかん</sup>が無い鄧小平<sup>とうんぺい</sup>を形容できる。弱小<sup>じやくせう</sup>の者<sup>もの</sup>にも其れ<sup>その</sup>相<sup>あ</sup>應<sup>おう</sup>の意地<sup>いぢ</sup>が有るから侮<sup>あなど</sup>り難い<sup>がたし</sup>という意の日本の熟語と合せて用いれば、上記の副題の意識として「弊社は小さいものの、一寸の虫にも五分の魂<sup>こゝろたましい</sup>」が好<sup>この</sup>かろう。両言語共通の「真面目<sup>まじめ</sup>」と類義の和製漢語「真骨頂<sup>まごてい</sup>」(其の真価<sup>まご</sup>と為る姿。本来<sup>ほんらい</sup>の姿)の字面から、中国語の「頂<sup>てい</sup>」の「(頭<sup>づつ</sup>や角<sup>かく</sup>で)突<sup>つ</sup>く」「逆<sup>さか</sup>らう<sup>たてつ</sup>」「榊<sup>さか</sup>突<sup>つ</sup>く」等「硬骨頭<sup>こうこつとう</sup>」的な意が思い<sup>うか</sup>泛<sup>はん</sup>ぶ。「窮<sup>きゆう</sup>且<sup>かつ</sup>益<sup>えき</sup>堅<sup>けん</sup>、不<sup>ふ</sup>墜<sup>たい</sup>青雲<sup>せいうん</sup>之<sup>の</sup>志<sup>し</sup>」(窮<sup>きゆう</sup>しては且<sup>かつ</sup>に益<sup>えき</sup>堅<sup>けん</sup>からとして、青雲<sup>せいうん</sup>之<sup>の</sup>志<sup>し</sup>を墜<sup>たい</sup>さず)という、初唐<sup>しよたう</sup>の詩人<sup>しじん</sup>王勃<sup>わうはく</sup> (650 或いは49~76)が天折<sup>てんせつ</sup>の前年<sup>ぜんねん</sup>に書いた「滕王閣序<sup>とうわうかくしよ</sup>」の名句<sup>めいこ</sup>を念頭<sup>ねんとう</sup>に置けば、「窮骨頭<sup>きゆうこつとう</sup>」云々は日本語で「頂<sup>てい</sup>ノぶ<sup>ぶ</sup>つかり」と言う<sup>い</sup>困碁<sup>こんぎ</sup>の「頂<sup>てい</sup>」の様<sup>よう</sup>な強硬<sup>きやうごう</sup>さを感じさせる。「頂<sup>てい</sup>」の中で特に強烈な「鼻頂<sup>びてい</sup>」は日本語で「鼻付<sup>はなづけ</sup>」(『日本国語大辞典』の語釈 = 「(名) 困碁で、伸びている相手の石の先端につける手」と言い、直列した長い石 (多くの場合は2目)の先端につける手は「天狗<sup>てんぐ</sup>の鼻付<sup>びなづけ</sup>」の異名を持つが、「猫舐虎鼻梁——找死<sup>なうしやうにしゃく</sup>」(猫<sup>ねこ</sup>が虎<sup>こ</sup>の鼻<sup>び</sup>を舐<sup>な</sup>める——自殺<sup>じそく</sup>行為<sup>けいゐ</sup>をする)という中国<sup>ちゆうごく</sup>の歇後語<sup>けつご</sup>の様<sup>よう</sup>に、猛威<sup>まうゐ</sup>を揮<sup>ふる</sup>える者<sup>もの</sup>の鼻<sup>び</sup>との接触<sup>そしやく</sup>は其<sup>その</sup>癩<sup>しか</sup>に触<sup>さわ</sup>り或<sup>ある</sup>いは逆鱗<sup>げきりん</sup>に触<sup>ふ</sup>れて自滅<sup>じめつ</sup>を招<sup>まね</sup>きかねない。

中国独特の「歇後語」は謎掛<sup>なぞかけ</sup>け→謎解<sup>と</sup>きに似た上下2句から成る洒落<sup>しゃれ</sup>た掛詞<sup>かけことば</sup>で、普通上<sup>ふつじやうじやう</sup>の句だけを言って下の句を略すという「後<sup>か</sup>ろを歇<sup>けつ</sup>く」仕組みが名称<sup>めいしやう</sup>の由来<sup>ゆらい</sup>である。例えば、「丈二和尚<sup>じやうじにわうしやう</sup>/金剛——摸不着頭腦<sup>もさくしやうにしやく</sup>」は「身長<sup>しんじやう</sup> 1丈2尺 (= 4尺)の和尚<sup>わうしやう</sup> (又は金剛)——其<sup>その</sup>の頭<sup>かぶ</sup>に触れる事が出来ない」意から、転じて「手掛<sup>てつか</sup>りが掴<sup>つか</sup>めない」「見当<sup>けんたう</sup>が付かない」という喩<sup>ゆゑ</sup>えに成る。日本語で「摸索<sup>もさく</sup>」「掏摸<sup>たうも</sup>」(中国語 = 「小偷<sup>しよてう</sup>・扒手<sup>ぱしゆ</sup>」)等にしか使<sup>つか</sup>われない「摸<sup>も</sup>」は「撫摸<sup>ぶも</sup>」(撫<sup>な</sup>でる)意も有るが、元より物理的に触れられない人工頭脳<sup>じんこうとうのう</sup>のAlphaGoは人智<sup>じんち</sup>の理解<sup>りかい</sup>を超えた怪力<sup>かいりき</sup>が証明<sup>しょうめい</sup>されると、正に人間の倍以上<sup>ふえいじやう</sup>に高い「金剛(身)<sup>こんごう(み)</sup>」(金剛<sup>こんごう</sup>の様<sup>よう</sup>に不壊<sup>ふゑ</sup>の身<sup>み</sup>)。仏身<sup>ぶつみ</sup>の観<sup>かん</sup>を帯びるに至<sup>いた</sup>った。其<sup>その</sup>の異次元<sup>いじげん</sup>の思考回路<sup>しやうこうくわい</sup>や神秘<sup>しんぴ</sup>な脳内構造<sup>のうないこうぞう</sup>を巡<sup>めぐ</sup>って人類<sup>じんるい</sup>は摸索<sup>もさく</sup>や接近<sup>せつじん</sup>を試<sup>し</sup>みているが、同じ漢字文化圏<sup>かんじぶんわくわん</sup>の中・日両国<sup>ちゅうにっくわう</sup>の間には「歇後(語)<sup>けつご(ご)</sup>」の様態<sup>ようたい</sup>が示<sup>し</sup>す様に不思議<sup>ふしぎ</sup>な差異<sup>さふい</sup>が多い。「歇後」は『広辞苑』では「ある語句の語尾を略し、前半で語句全体の意を含ませること。“有于兄弟”を“有于”と云って、“兄弟”の意とする類」と説明され、『日本国語大辞典』の語釈は「(名) 語句の後半を省いて、残った前半でその語句全体の意味をもたせること。『詩経-大雅・文王有声』の“貽<sup>い</sup>=厥孫謀<sup>くわくそんぼう</sup>」の句に基づいて、“貽<sup>い</sup>厥<sup>くわく</sup>”と云って子孫<sup>しよそん</sup>の意とする類」と為る。「有于<sup>ゆうゆう</sup>」は『広辞苑』にも有る (= 「[書経君陳“友于兄弟”]①兄弟仲のよいこと。②転じて、兄弟)が、中国では今や「貽<sup>い</sup>厥<sup>くわく</sup>」と同じく中型国語辞書には見当<sup>けんたう</sup>らず相当<sup>しやうたう</sup>の知識人<sup>ちやくしきじん</sup>しか知らない。但し熟語等の前半だけ言い後半<sup>ご</sup>を歇<sup>けつ</sup>めて全体<sup>ぜんたい</sup>の意味<sup>いみ</sup>を表すという含蓄<sup>かんじやく</sup>の有る話法<sup>わはふ</sup>も発達し、一例は鄧小平<sup>とうんぺい</sup>が第2回「中日囲碁擂台賽」(日本側の名称 = 「日

中スーパー囲碁)の瀬戸際に聶衛平に贈った「哀兵」<sup>32)</sup>である。聶主将の背水の格闘の勇氣を奮い立たせた「哀兵」(哀しむ兵)は下に「必勝」(必ず勝つ)と続き、『新快報』編輯陣が賽を投げる時も恐らく同様の悲壮な決意を秘めていたか知れないが、日本では中国人の可く知っている此の四字熟語どころか「哀兵」の単語さえ入っていない。

### 国・共両軍の金門死闘が示した「哀兵必勝・驕兵必敗」

「哀兵必勝」は「抗兵相加，哀者勝矣」(兵を抗げて相加うるに，哀しむ者勝つ)という，春秋時代(前770～前476)の思想家老子の同名著書(別称『道德経』)の第69章の最後の言に由来した。対を成す「驕兵必敗」(驕れる兵は必ず敗れる)は班固(32～92)撰『漢書』「魏相伝」が出典であるが，上記の老子語録の前の「禍莫大於輕敵，輕敵幾喪吾宝」(禍は敵を輕んずるより大は莫く，敵を輕んずれば吾が宝を喪うに幾し)に祖形が見られる。囲碁・地域の例を挙げるなら中国・台湾間の金門戦役(1949.10.25～27)が有り，中共軍の上陸作戦が創設(27.8.1)後未曾有の3個聯隊(9千人)全滅に終った惨敗は，渡海作戦の不測の困難と国民党軍の懸命な抵抗を輕視した故の準備不足が主因とされる。第3(華東)野戦軍第10兵团が同月17日に厦門の攻め落しで福建省の略全域を制圧した後，司令官葉飛(35)は2野第1縱隊(軍団)司令官時代の孟良崗戦役(47.5.13～16)等の大功や，破竹の勢い及び10万人対8千人の兵員差に由って「輕敵」(敵を輕視する)気分<sup>33)</sup>に浸り，海を隔てて本土の至近距離(最短で2千強)に在る金門島の攻略を非主力の28軍に委ねた。同軍(軍団)は「阻擊戰」(阻止戰)に長け「攻堅戰」(堅塁攻撃戰)の実績が乏しい上で，生憎軍(団)長・政治委員・參謀長が病氣や公務其の他の事由で揃って不在であり，副軍長肖鋒(33)も「掃尾」(残りの仕上げ)と輕く見て其々3つの師(師団)に属する聯隊を派遣し，必勝の前提で出番の少なかった彼等に戦利品が獲れる様に協調し難い布陣をしたのである。葉は宴席で皿の中の肉を指して金門は此れと同様に何時でも食える物だと豪語したが，言わば控え席に坐る時間の長い選手に最後の1本の花を持たせようという安易な動機は，全員が戦死や俘虜にされ延いては生き埋めにされるという凄愴で無意味な犠牲を招いた。囲碁術語の「持ち込み」(『広辞苑』には見当たらず，『日本国語大辞典』の当該項目の②の語釈＝「囲碁で，相手の地域内または勢力下に打って，外側から包まれて取られてしまうこと」)は，後続手段が無い思い付きの突撃に由る此の「送死」(自ら死を求める)に適用できる。

金門防衛司令官李良榮中将(40)の率いる第22兵团が第1波の強攻を撥ね返せたのは，古来の兵法で言う「置之死地而後生」(之を死地に置いて後に生きる)の為だけでなく，蒋介石の嫡系部隊と違って物心両面で差別された「哀兵」の立場も死闘の駆動力と思われる。秦末の武將項羽(前232～前202)の「破釜沈舟」(釜を壊し舟を沈めること)に倣って，彼は決

囲碁の「酷」と人智の「魔」—— 究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方 (1) (夏剛・夏冰)

戦前に数艘の大型船を爆破し約200キも離れた台湾への撤退の手段を自ら無くした。装備貧弱<sup>ひんじやく</sup>の故「乞丐<sup>こじき</sup>」と督戦者の湯恩伯上将・福建省主席に言われた兵団は、食うか食わないかの絶境の中で攻撃を最大の防御とする心算で必死に反撃し、聯隊長(中国語=「团长」)が率先して敵陣へ突っ込もうとして射殺されるという中共軍にも滅多に無い蛮勇を見せた。「兩軍相逢勇者勝(兩軍が対戦すれば勇敢な方が勝つ)」という格言と照らせば、「智勇双全」(智・勇兼備)で名を轟かす中共軍は今回両方の強みとも発揮できなかった。所属師団が違う3聯隊を統括する師団級の指揮官が行かなかった事は<sup>きあい</sup>気合の負けを意味し、敵に上陸地点を予知され数時間前に其の場所で反上陸演習が行われた事は<sup>しほ</sup>戦術の失敗である。「哀兵」は孤立無援の中で闘志を失わない限り超絶の智慧・能力を絞り出す事が有り、最精鋭級の友軍第12兵团(司令官=胡璉中將 [40])の増援も競争心を刺激したであろう。

渡邊恒雄は読売新聞社社長在任中の回顧録(中央公論新社, 2000)の中で長年の政界観察に基づいて、「日本の戦後史の流れを見たとき、イデオロギーや外交戦略といった政策は、必ずしも絶対的なものではなく、人間の権力闘争のなかでの、憎悪、嫉妬、そしてコンプレックスといったもののほうが、大きく作用してきた」と述べている<sup>33)</sup>。蒋介石は大陸から敗退する前に自分は中共ならぬ党内派閥に追い落されたのだと言った<sup>34)</sup>が、弱小だった中共に逆転負けした要因として嫉妬・憎悪が絡む権力闘争に由る不和が大きい。国民党側が上陸地点に因んで称す「古寧頭戦役」の保衛成功や台湾の政権維持・経済発展は、存亡に関する非常事態で内訌の余裕が無い団結・奮起せざるを得ない悲情に駆られた処が多い。人間の生臭い感情や赤裸々な欲望を政治・外交の原動力としたニクソン元米大統領の見方<sup>35)</sup>は、国際関係は突き詰めれば「人際関係」(人間関係を表す中国語)であるという原理を示唆し、其の適応範囲は軍事・経済・文化・社会生活乃至囲碁を含む競技に広げても差し支えない。人間の感情の中で特に隠微な<sup>コンプレックス</sup>complexは内面の複雑な感情・葛藤と劣等感の両義を持つが、中国語で其々「情結」「自卑」で対応する此の両面が「哀兵」李良栄兵团に有ったとすれば、国民党軍5大主力部隊中最初に殲滅された整編第74師への攻撃の先陣に立った葉飛兵团と、元5大主力の1の編制で立て直した胡璉兵团への忌憚・敬意と敵愾心・対抗意識が考えられる。

『超限戦』を著した2人の空軍大佐(1955、54年生れ)と同年代(52年生れ)の劉亞洲は、喬良と同じ空軍専属作家の出身で2003年に空軍副政治委員、09年に国防大学政治委員に抜擢され、12年に空軍上将(「文革」後の最高階級)を授与され党中央委員にも当選された。義父の李先念は党中央副主席(1977~81)・国家主席(83~88)等を歴任した大物なので、妻の李小林(2011年から中国人民対外友好協会会長)と共に「太子党」と目されているが、他の2世、3世政治家・将校と違って時々大胆な自説を開陳し常人の度肝を抜いたりする。01年頃から<sup>ネット</sup>電脳網上で流布している「金門戦役検討」(「検討」は過誤への追究、反省、検証の多義が有る)の中で、葉飛・肖鋒等の大先輩の失策を容赦無く非難し敵の将兵の頑強・智謀を公平に賛嘆

した。李良榮評で印象的なのは先ず党・軍の派閥闘争の中の「取弱勢」（低姿勢を取る）であり、彼は明らかに**柔弱・低姿勢を最強とする老子の自然流哲学**が少し分っていたはずだと言う。人類が崇める強盛は所詮長続きせず最も低い海が水や万物の帰着先に成ると言う講釈は、『老子』第61章の「大国者下流」（大国なる者は下流なり）の逆説を踏まえたものである。彼が「毛沢東在大範圍圍攻我們，我們在小範圍反擊他們」（毛沢東は大きな範囲で我々を囲い攻めるが、我々は小範囲で彼等に反撃する）と定めた方針も、**曾て己に勝った敵の有力な戦法で敵に逆襲する柔軟な発想**として劉の高い評価を得ている。昔我々が江西で「**圍剿**」（**包圍討伐**）した時に彼等は此の戦術で対抗したのだと言う李は、江西省の中共根拠地に対する5回の「**圍剿**」（1930.10～34.10）の経験・教訓を汲んでいる。日本で殆ど馴染が無い「**剿**」（討伐する）は字形が象徴する様に**巢を刀で抉る行為**であるが、日本語に無い「**圍攻**」（**包圍・攻撃する**）は中国の**圍碁の定義**にも能く出て来る。

第1～4次「反「**圍剿**」」に成功した赤軍は毛沢東が党・軍の最高指導部から外された後、「**共产國際**」の独逸人軍事顧問ブラウン（中国名「**李徳**」，派遣時の1932年に32歳）の杜撰な指揮で、第5次（33.10～）では負け「**中華蘇維埃共和国**」（毛が中央臨時政府中央執行委員会主席）の「**首都**」**瑞金**が陥落した。中国工農紅軍第1方面軍（中央労農赤軍）は34年10月10日から幾重もの**包圍網**を突破して、翌年10月19日に陝西北部の呉起鎮に辿り着き1万2500名の長征を成し遂げた。途中で毛が指揮権を奪還した**長征**は日本語に無い「**突圍**」（**包圍網突破**）の連続と言えるが、長征勝利27周年の日に浙江省寧波で生れた劉亜洲は胡璉の別の「**突圍**」伝説を取り上げた。46年6月26日の中原軍区（李先念が司令官）の「**突圍**」で始まった第2次国共内戦は、国民党側が「**徐蚌会戦**」と言う**淮海戦役**（48.11.6～49.1.10）で解放軍の勝勢が確実と成り、中でも11月25日～12月15日の12兵团に対する「**困殲**」（**包圍・殲滅**）が**決定打**と成った。**鉄壁**の封鎖に遭った兵团の司令部の庭の中の木も「**困**」の字を連想させるとして切られた<sup>36)</sup>ので、食糧が**落下傘**での投下に頼る程「**被圍困**」（封じ込められる）の窮境は絶望的であった。司令官**黄維**中将（44）は胡璉副司令官の**脱出案**を否定し名節を全う固守の末に俘虜と成り、胡は臆病と見做される事を憚らず戦車に乗って**危地**を離脱し兵团**再建**の**命綱**を確保した。黄維兵团が完全に**包圍**された後**忌引**で滞在中の故郷から飛行機で司令部に戻った**義節**や、死を覚悟して単騎で敵の**長蛇**の列と擦れ違いながら**狂奔**した**度胸**は前から有名であるが、劉亜洲が特筆した彼の**金門**到着時の武勇伝は身の毛が**弥立**つ程恐ろしく俄かには信じ難い。解放軍が島の北部で上陸した直後に暴風の中で南部に着いた12兵团は埠頭が無い悪条件の下で、寸刻を争うべく輸送船から海岸に泊めてある船に1人1人飛んで行き其処から降りる事にした。狂猛な風・浪の具合を勘案して最も接近する瞬間を狙う「**空中飛人**」は危険極まり無い遣り方で、最初に挑む中隊長（中国語＝「**連長**」）は**時機**の外れで両船に**扶まれ無残**に押し潰されたが、胡は衆人の心胆を寒からしめた其の即死に動揺せず自ら飛び越えて

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A I</sup>智能4強の特質・行方 (1) (夏剛・夏冰)

一挙に士気を鼓舞した。合理主義を武器に大陸を制覇できた中共では司令官は絶対こんな命懸けの賭けはしないが、功夫映画の名優でも身替りの代役に頼む様な冒険は「勇ましい者が勝つ」結果に繋がった。

胡璉は最終日の歩兵・砲兵・空軍合同総攻撃の際に敵の残部の頑強な抵抗を眼の当りにして、思わず「大陸怎得不丟」(大陸を失わない事がどうして有り得ようか)と感慨深げに呟いた。同様に相手の強さと自陣営の不足を認める劉亜洲の痛恨の検証も一言で要約すれば、「金門焉能不败」(金門で[我が軍が]負けない事はどうして出来ようか)に尽きる。毛沢東は大分前に胡璉を「狡如狐，勇如虎」(狡猾で狐の如く，勇猛で虎の如し)と評し，第2(中原)・第3野戦軍に「宜趨避之」(之[胡の第18軍]を避けるが宜しい)と指示した<sup>37)</sup>。其の嚴重な注意にも拘らず選りに選って12兵团増援の日の上陸を敢行した失敗は，胡を警戒しながら其の増援の兆しを悉く無視した葉飛・肖鋒の頑迷さに帰されている。胡兵团の「神風」が来た時には李兵团の台湾への駐屯地移動は未だ実施されていないので，上陸作戦は3日早くか3日遅く行われたのなら結末は違って来るかれ知れないと劉は言う。彼が最も許せないのは俘虜の供述で胡兵团の動向を聞いても重視しなかった反応であるが，思い込みに固執し僥倖を期待する心理は或る意味では人間共通の弱点と言えなくもない。目下人工<sup>A I</sup>智能に由る経済情勢分析や金融資産運用が先進国で流行り出した合理性として，人智の長所・蓄積を吸収し発展させつつ人間の主観・感情を排除する客観性・科学性が有る。人には不都合の情報を遮断したり無関係の物として切り捨てたりする傾向が見られるが，孔子が還暦の修養の到達点とした「耳順」(理に適える事を聞けば容易に理解できる)は，人工<sup>A I</sup>智能の場合では人間にとって「不順耳」(耳障り)の情報の積極的な受容も含まれる。「哀兵」「驕兵」「狡狐」「猛虎」「勇者」「弱勢」等と次元が異なる人工<sup>A I</sup>智能の有り形を媒介に，近来其の驚異的な戦果を上げて来た2種類の究極の頭脳競技——一騎打を基本とする囲碁と億人単位の同時参加が可能な金融投資，及び人智と人工<sup>A I</sup>智能、人間社会と電脳網世界の様々な面白い様態と奥深い原理が見えて来る。

## 「合成の誤謬・誤謬の合成」と「強勢の冒険・過信の陥穽」

『日本経済新聞』2016年4月5日の1面の「市場の力学 投資の新潮流② “熟練トレーダー”AI 参上 / 相手は機械 / 戻らぬ時代」(連載4回，川上 穰等7名担当)に拠ると，米運用会社ゴールドマン・サックス・アセット・マネジメントはAIを使い，年100万本に上るアナリストレポートを解析して株価材料の体系を作り，報告書に「業績悪化」「収益低迷」の類の否定的な言葉が多いと投資判断を下方修正する等と試みており，米投資会社バーチュ・ファイナンシャルは14年3月に過去の1238日の取引で損を出したのは1回だけと発表し市場関係者を驚かせた。経済情報週刊誌『ダイヤモンド』(ダイヤモンド社)5月17日号に有る論説「政府・日

銀の景況感を指数化/文章の読解力が高まったAIが、経済分析で効果を発揮している」(水門善之 [野村証券金融経済研究所エコノミスト]・山本祐樹 [野村証券金融工学研究センター・シニアクオンツアナリスト]) では、深層学習による文脈把握の精度向上で野村AI景気感指数が景気の山と谷に合致していた事が紹介されている。『日経』5月9日夕刊の報道「ファンド運用 AI台頭/膨大データ解析、自動で売買/相場低迷でも好成績/技術者スカウトも活発」(ニューヨーク=山下晃)の中で、人工知能自動運用基金の増加に伴う人材獲得競争の実態として、世界最大のヘッジ・ファンドや英系大手基金が米アップル・IBM・グーグルの幹部や開発者を迎えた事が報じられている。経済情報紙『フジサンケイビジネスアイ』(日本工業新聞新社、月～土曜刊)3月31日の「個人向け資産運用ロボ続々/フィデリティ参入で競争激化」(Margaret Collins)に、米投資信託2位のフィデリティ・インベストメンツが前日に少数の既存顧客群を対象に、「フィデリティGo」と名付けた資産運用ロボット助言業務の試験運用を開始したと有る。先駆の他社や業界最大手に追随した新機軸の名は時の「AlphaGo効果」を連想させるが、意図の有無に関らず此処で又IBM・グーグルと出交すのは人工知能活躍元年の脈動を思わせる。

『日本経済新聞』の上記特集記事の①「荒れる相場“変動率”が支配/安全志向が生む不安定」(4月5日)は、年明けから波乱に見舞われた世界の金融市場は従来の常識では捉え切れない新たな力学に支配され始めたと言及する。曰く、日経平均株価の月間の高値と安値の差は此の1年の平均で1600円台で2008年のリーマン衝撃後も上回り、米国株も値幅が広がっている等の状況を作った犯人として資産を渡り歩く変り身の速い投資家の1群が槍玉に挙げられた。株・債券から資源・米・牛乳まで何でも手を出す此等の商品投資顧問は貪欲に利益を求め一方、資産選択の基準は安全志向であり値動きの荒っぽさを示す価格変動率を重要な指標とし、これが一定の水準を超えると危険性が高まったと判断し資産を自動的に減らし零に落す事も有る；08年以来世界の投資家が相場急落による損害を防ぐ為に智慧を絞って行き着いた手段であるが、多くの人が同様の方法で危険性を察知し素早く回避に走るから市場は一方向に動き易くなる；「安全志向の高まりが不安定な相場を生む皮肉。投資手法の高度化が進んでも、リスクは形を変え市場につきまとう。」危機時でも収益を上げる役割から批判に意を介さない世界2位の商品投資顧問英マンAHLでは、400超の運用市場であらゆる資産の変動率を24時間体制で監視し、日本でも2月8日にDIAMアセットマネジメントの公募投資信託を運用する星野元伸の個人用パソコンに警戒信号が点灯し、日本銀行の負金利政策による金利動向の不安定と国内債券の運用危険性の増大を示す電脳運用指令体系の判断に従って、当人(運用ソリューション本部長)は直ぐ様債券を売り現金の比率を増やした、と述べている。日本でも額に汗を掻く現場経験と決してぶれない電脳算法との結合の相乗効果の信者が居る<sup>38)</sup>が、4日後に日経VI指数(恐怖指数の日経平均株価)が空前の50.24に達し、2週間後の終値34.09も猶投資



囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方 (1) (夏剛・夏冰)

家が先行きに強い不透明感を持つ水準 (30 超) に在った。「荒れる相場は宿命か/マイナス金利下の“新常态”」と題する『日経』2月27日の記事(証券部次長<sup>かわさきたけし</sup> 川崎健)では、過去30日の日本株の変動率は年率44%で世界の主要市場の中で堂々の首位であり、中国の上海・深圳や伯刺西爾を上回る荒れ振りに理由を訊く投資家が後を絶たないのも宜なる哉<sup>かな</sup>と言うが、人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>が誘導した<sup>リスク・ヘッジ</sup>危険性回避の為の地球規模の同時多発的な連鎖暴走とも断じられよう。

此の場合に当て嵌る「合成の誤謬」は『広辞苑』現行版から立項され、「[経] (fallacy of composition) 個人や個別企業などのレベルで妥当することが、社会全体の大きなレベルでは妥当しないということ。例えば、個々人が所得のうち貯蓄する割合を二倍にしても、有効需要が減少して国民所得で示された総生産額も縮小し、所得の減少が貯蓄の減少につながるため、社会全体の貯蓄は二倍にならないなどの類。結合の誤り」と詳解されている。『日本国語大辞典』の【合成】の熟語項は、『広辞苑』に無い【ごうせいの虚偽(きょぎ)】(=「部分の真理が全体の真理であると論じる虚偽。または成員の真理が集合の真理であると論じる虚偽」)だけである。疾うの昔の経済学の教科書等に出ている此の「合成の誤謬」が普及・定着に至ったのは、上記挙例の所得の減少や生活防衛意識の増強、貯蓄と有効需要の二律背反と合せ考えれば、1990年代中期以降の通貨収縮不況の常態化と時期的に合致する点が示唆<sup>と</sup>に富む。上記報道の見出し中の「マイナス金利」「新常态」も両辞書に無い比較的新しい語であるが、日本では<sup>マイナス</sup>金利は2003年6月25日に国内金融機関同士の短期資金貸借<sup>たいしやく</sup>で初めて発生し<sup>39)</sup>、日本銀行も16年2月16日に12年以降の欧州の一部の国に倣って政策金利で導入した。「新常态」は15年3月5日に李克強総理が全国人民代表大会(国会)に対する「政府工作(活動)報告」で、中国の今後3年の経済成長率が7%前後に下がる事を宣言する際に使われた。物事の名・実は能く鶏と卵との様な相互因果関係に在り辞書は常に現実の後写鏡であるが、中国では高成長から中成長へと切り替えた直後に株式市場の<sup>バブル</sup>泡沫が<sup>ぼうちよう</sup>膨脹→破裂の急変を演じ、日本の株式市場の恐怖指数と金利政策の異変も16年2月中旬に未知の領域に突入した。15年10月のAlphaGoの対欧州囲碁王者である職業棋士の5連勝に伏線が敷かれ、16年第1四半期の成果発表・対世界最強級棋士5局勝負で起きた人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>狂騒も、「<sup>ブラック・スワン</sup>黑白鳥」の出現を超える次元の人類未経験の大変革の「新常态」の到来を意味する。

<sup>ブラック・スワン</sup>黑白鳥発見300周年に当る1997年には香港返還の翌日(7.2)亜細亜通貨危機が勃発し、10月27日に10年前の同月19日と同じ大暴落が米国の株式市場で起り世界に波及した。スカッシュ<sup>チャンピオン</sup>全米大学生王者・教授職を経験した著名投機家ニーダーホフアー(53)は、大衆の過<sup>か</sup>剰<sup>じよう</sup>反応は一過性の物で翌日には反発すると予想して<sup>フット・オブション</sup>指数の売<sup>ばい</sup>権利を大量に売った。長年の好成績で世界一の相場師と囃される彼の<sup>おもわく</sup>思惑通り翌朝10時過ぎから株価が暴騰したが、30分余り前の寄り付きの時点で巨額の損失が確定し強制<sup>けっさい</sup>決済の結果其の<sup>そ</sup>基金は<sup>ファン</sup>破綻した。<sup>はたん</sup>所持資金以上の賭けで5千万<sup>くめん</sup>ドル(61億円)の追加保証金が<sup>ばくだい</sup>工面できず<sup>わけ</sup>莫大の損を出した訳である<sup>40)</sup>が、

実業家・投資家の祖父が29年の米株大暴落（10.24、28、29）で全財産を失った事<sup>41)</sup>を思えば、個人や米国乃至資本主義の範囲を超える人類の強欲の遺伝子と歴史の循環が感じられる。日本放送協会のテレビ報道特集「マネー革命」（98.11.23、29、12.6、11放送）の第1回は、「1日で50億円失った男～ある投機家の栄光と挫折」の題で彼の浮沈を追跡したが、第2～4回の「世界は利息に飢えている」「金融工学の旗手たち」「リスクが地球を駆けめぐる」は、今日の世界中の「利回り難民」が収益を求めて「肉食系」の冒険投資に大挙出動する有様や、先端の運用理論や人工智能等の電脳網上の助力が市場の変形を助長しかねない危険性には、「前車覆、後車戒」（前車の覆るは後車の戒め）という警告の意義が依然として有る。

下落に賭けて深入りする投機筋が嵌り易い罠として相場の反転に翻弄される事が挙げられ、例えば踏み上げ（『広辞苑』の語釈＝「信用取引で売り建てている株を損を覚悟で買戻しによってさらに相場が上昇すること。大阪では“煎いれ上げ”という」）に遭った時、一辺倒の高騰で予想外の高値掴みをさせられ強烈な竹炭返しを食う事態が常に発生する。関連の【手仕舞】は「清算取引や信用取引で、売建玉<sup>うりたて</sup>と買建玉<sup>かいたて</sup>を反対売買や現引<sup>ひき</sup>・現渡しにより決済すること」で、「玉」は当該項目の「⑤（取引用語）⑦取引所で、取引の対象となる商品や証券。④建玉<sup>たて</sup>の略」の后者は、「株式の信用取引や商品の先物<sup>きま</sup>取引などにおいて、売買約定<sup>やうじ</sup>をした株式・商品で未決済のもの。売りの場合を売建玉、買いの場合を買建玉という」意であるが、『日本国語大辞典』の熟語項【ぎよくが消（き）える】の「①相場の変動によって証拠金が不足になったため、証券や商品が処分される」は、上記の実例が示した様に和製漢語「無残」の語義・字面の通り極めて冷厳な場合が多い。

玉の粉碎・「摧残」（毀損。蹂躪）で連想される『広辞苑』の【玉碎・玉摧】は、「〔北齊書元景安伝“大丈夫寧ろ玉碎す可きも、瓦全する能はず”玉が美しく碎けるように、名誉や忠義を重んじて、いさぎよく死ぬこと。↔瓦全〕と説明されている。『日本国語大辞典』の用例は日露戦争初年の「火の柱（1904）〈木下尚江〉三・一“葉末の露もろく散りて空しく地に玉碎す”」に始まり、太平洋戦争勃発1年半後の「夢声戦争日記〈徳川夢声〉昭和一八年（1943）五月“五月三十一日の新聞には、アッツ島の守備隊全員玉碎という大変な記事が出た”」、敗戦翌年の「桜島（梅崎春生）〈1946〉“どうせ私達は南方の玉碎部隊だと”」が続く。米国領アッツ島を巡る攻防（5.12～29）は第2次世界大戦中に北米で唯一行われた地上戦で、大本営は全滅（2600人強の99%戦死）を公表する際に美化語の「玉碎」を初めて使った。『広辞苑』の【大本営発表】の「①大本営が発表する戦争に関する情報」に次ぐ「②権力を持つ側が一方的に流す、自らに都合の良い情報」は、自国の歴史の教訓への内省と国際社会でよく見られる弊害への批判が含まれているが、権力者側や報道機関の情報操作や不都合な真実に対する隠蔽は当時も現在も中国の方が酷い。指揮の誤り等の「誤謬の合成」（造語）に由る「玉碎」は金門島強攻の全軍覆没も一緒であるが、敗戦の史実は40年以上経って漸く開示され劉亜洲の「検討」

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方(1)(夏剛・夏冰)

で初めて公に真相・深層が掘り下げられた。情報封鎖の中の「網開一面」(網の4面の1面はあけて置く。転じて、追い詰めず残存の道を与える)は高官の特権だけでなく、出版物ならぬ電脳<sup>ネット</sup>上の流布の形が象徴する21世紀の新しい空気<sup>ふうけつ</sup>の風穴を窺わせる。

『日本国語大辞典』の【玉碎・玉摧】の下の行に【極左冒険主義】の項が有り、語釈の「(名)危険をかえりみずに、極端に急進的、革命的な行為を実行しようとする考え方」と、用例の「現実拒否の文学(1956)〈大井広介〉四“極左冒険主義は大衆に甚大な被害を与え運動を後退させ”」とから成る。中国では「左傾冒険主義」と言う此の傾向は20年代から共産党に甚大な被害を与え、上記用例が日本で現れた後の「大躍進」「文革」も経済・政治分野の極左冒険に他ならない。僅か2年で工業の主要な分野で英国を追い越すよう59年の鉄鋼生産高を前年の倍にする<sup>42)</sup>等、誤謬相乗の白日夢に駆られた「大躍進」の泡沫は廳で弾けて大不況・大飢饉を招来した。千万人単位の「非正常死亡」(栄養失調や迫害等による人命犠牲を糊塗する当局の言い回し)は、穩健な路線を「右傾保守主義」として斥けた「強勢の誤謬」(造語)の結果と言える。中国語の「諧音」(語呂合せ)の「諧」は音の和諧(調和。合致)と共に義の諧謔<sup>かいぎやく</sup>も含み得るが、『日本国語大辞典』の【強勢・豪勢・剛勢】の「■(名)(形動)(古くは“こうせい”とも)」の中の、「①強く盛んな勢い。強く勢いのよいこと。また、勢いの強く盛んなさま」「③程度のはなはだしいさま」の両義は、強権統治・強力推進の下で世界強豪の座を目指す努力乃至冒険の傾向に妙に符合する。紐育在勤の投資銀行家神谷秀樹著『強欲資本主義 ウォール街の自爆』(文藝春秋、2008)に触発されて、翌年に遊川和郎(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授)の『強欲社会主義 中国・グローバルの功罪』(小学館)が出た<sup>43)</sup>が、英国の経済学者ストレンジ著『賭博資本主義』(1986。日本語版=小林 襄 治訳、岩波書店88年刊『カジノ資本主義』)と合せれば、欧米の「賭博/強欲資本主義」と中国の「強権/強欲社会主義」の共通の「過信の陥穽」に気が付く。

前出の天才投機家の破滅劇にも見られた仕組みは『広辞苑』の【信用取引】②で、「顧客が委託証拠金を証券会社に預託し、買付資金または売付証券を借りて売買を行い、所定の期限内に返済する取引。一九五一年(昭和二六)アメリカの制度にならって導入。制度信用取引と一般取引とがある」と説明されている。少ない自己資本で大きな資金を動かす金融取引制度の「レバレッジ」の項は不思議に無い(「レバレッジド・リース【leveraged lease】投資家からの出資金と銀行などからの借入金で購入した資産をリースし、そこから得られる利益を投資家に分配する事業」が有る)が、第5版刊行時(98.11.11)已に先進国で一般化した錬金術としての梘<sup>てこ</sup>の原理の応用は、「レバレッジド・リース」を収録しない『日本国語大辞典』の当該項目では、「(名)(英leverage 梘子[てこ]の力の意)借入金など他人資本を活用して、自己資本の収益率を高めるよう梘子入れすること」と紹介されている。梘子の原理を発見した古代希臘<sup>ギリシャ</sup>の数学者・物理学者アルキメデス(前287~前212)は、十分に長い梘子と支点を自分に

与えられれば地球をも動かして見せると豪語した。実際に出来る訳が無い夢物語を描いた科学者の浪漫は御愛嬌として受け止めれば可い<sup>よ</sup>が、数倍乃至数十倍もの高い槓桿率<sup>レバレッジ</sup>（株式の信用取引や商品先物取引・外国為替証拠金取引等で自己資本・証拠金に対する取引額の大きさ）で行う賭けは、自信満々の相場予想が外れた場合の損失も期待収益率と同等の倍数で申し掛って来る。天国と地獄との間に紙一重<sup>かみひとえ</sup>の隔たりしか無いにも関わらず身を挺す冒険者は後を絶たないが、是非・善悪や得失・成敗は別として社会発展の動力を為す人間の進取の欲望が槓桿<sup>こうかん</sup>であろう。

### 心身の酷使が常態と為る「孤高な葦」の苦闘と脆弱

第2回「中日囲碁擂台賽」の主将決戦（1987.4.30, 東京）に臨む聶衛平は心臓が弱い為、前回・今回の数局の時と同じく酸素鉄筒<sup>さんそボンベ</sup>を持参して午前・午後各1回程度吸う事にした。控室の傍受映写装置で進行を見守る夫人（91年離婚）孔祥明八段は午後2時過ぎから、予定通り酸素吸入に出て来ない事と形勢が不利に傾いている事に苛立ち続けた。聶は武官正樹本因坊が中盤以降大竹英雄九段の勝ちと判断した碁を7時間半の闘いの末に制したが、混迷の局面で幾ら読んでも好手が見付かない為1時間も酸素吸入を忘れたと後に語った。中国では高度の機密保持が要る最高指導部の会議でもお湯の補充<sup>ほじゅう</sup>や薬の服用等に限って、雑用係<sup>がかり</sup>や配慮対象と為る要人の随員等の一時入室が特別に許可される場合が有る<sup>44)</sup>が、対局中の接触が出来ない孔は其の間夫が好機を再三逃している展開に泣き出しそうに辛く、大事な1戦なのに何故此程「昏」（惚けている）かと心の中で毒突いて悔んでいた<sup>45)</sup>。中国語の「昏」は「夕暮れ」「暗い」「（頭が）ほんやりている」「知覚を失う」等の意が有り、意識朦朧<sup>もうろう</sup>にも言う形容詞の「昏」の状態<sup>この</sup>で打つ「昏着/昏招」（「着・招」は同音・同声調の zhāo）は、「失着」の他「昏迷」の義・字に因んで「不覚の/間抜けな/馬鹿な手」「迷手」（造語）と訳せる（碁打ち等が使う此の酷評の言葉は国語辞書には載っておらず中日辞書にも当然出ない）が、中国王者の体質の特殊性を超えて頭脳競技の消耗<sup>しょうもう</sup>と酸欠の大変さが此的一幕で能く分る。

明治維新（1868）と戊戌変法（光緒帝主導の「百日維新」, 98.6.11~9.21）以降の日本と中国は、多くの分野の発展に於いて30年前後の時間差<sup>タイム・ラグ</sup>が見られ<sup>46)</sup>今も然程<sup>さほど</sup>変わっていない。近代文学（中国では日本語の「近代化」に対する「現代化」の様に「現代文学」と言う）の第1作も、二葉亭四迷の長篇『浮雲』（87~89）の約30年後に魯迅の短篇「狂人日記」（1918）が出た。新しい言文一致体を用いた日本の近代写実小説の先駆けと為る前者は、失職した青年官吏に対する周囲の態度の変化や彼の不安・苦悩の内面を描いており、「新文化運動」（15.9発足）から派生された「新文学」の初の白話文（口語文）小説である後者は、被害妄想患者<sup>かんじゃ</sup>の日記の形で5千年の歴史に潜む「吃人」（人食い）の暗部<sup>かっぼ</sup>を喝破している。「今天晚上、很好

的月光。我不見他，已是三十多年；今天見了，精神分外爽快。才知道以前的三十多年，全是發昏。」(今夜は、月が大変好い。私は彼を見なくなってから、もう30年余り経つ。今日は見たから、気分が格別に爽快である。過去の30数年は全くイカれていたのだ、と初めて気付いた。)日記の冒頭の此の悟りに出た「發昏」は「目が眩む」「惚ける。理性を失う」の意が有るが、毛沢東・華国鋒時代(49.10~81.6)の31年中の正氣喪失・誤謬<sup>しやうぎ</sup>続発も「發昏」と言える。関連の「頭脳發熱」(冷静さを失う。熱く成る)や「勝利衝昏頭脳」(勝利で思い上がる)は、金門上陸作戦の頓挫<sup>とんざ</sup>や「大躍進」「文革」の失政等の<sup>じんさい</sup>人災の精神面の要因として挙げられる。

サイバネティックス cybernetics の由来と為る希臘語の「船舶操縦術・舵取り」の意から「偉大的舵手」を連想するが、「文革」前期に毛沢東に捧げられた「4個“偉大”」(4つの「偉大」)の賛辞の中で、「偉大的導師、偉大的領袖、偉大的統帥」(偉大な導師・偉大な領袖・偉大な統帥)の後に此が有った。1966年8月18日に天安門広場で挙行された100万人の「紅衛兵」集会に於いて、党内序列2位、5位の林彪<sup>びやう</sup>副主席と陳伯達中央文化革命小組組長(推進本部本部長)は、演説の中で其々「偉大的統帥」と「偉大的領袖、偉大的導師、偉大的舵手」の礼賛をした。序列7位の康生「中央文革」顧問は外国語の辞書で調べた結果「導師」が一番尊いと判断し、日本人好みの「3大〜」と対照的な中国人の「4大」好みで上記の順に由って合成した<sup>47)</sup>。「大海航行靠舵手」(大海の航行は舵手が頼り)という毛沢東賛歌(李郁文作詞、王双印作曲、64)の様に、最後に位置した「舵手」も一同の存亡に関する故「導師」(導き手。教官)と同じ重みを持つ。毛の功罪を点検すれば建国前も含めて少なからぬ「誤導」(誤った導き)が目に余るが、独裁者に成る前は他者の有益な進言を受け入れて方向修正をし多くの誤りを回避できた。抗日戦争勝利後の45年冬に東北中共軍の総帥林彪は電報で毛に時局への判断を開陳し、蒋介石が両党の和平談判を提案した事は中共撲滅の為の時間稼ぎに過ぎないと指摘し、「請主席頭腦清醒考慮之」(主席には冷静な理性で之を考慮するよう請う)という、頭を冷やして健全な思考力を保って欲しい等の含みが有る峻厳な表現を敢えて使った。毛は自尊心を傷付けられた為か返電しなかったものの結果的に彼の判断を採用した<sup>48)</sup>が、50年代後半から異論を唱えた者は悉く排除されたので誤謬の暴走は止まらなく成った。1人の副軍長に指揮を委ねた金門強攻や助言を求め得ない<sup>かこく</sup>囲碁対戦の苛酷さにも思い至るが、棋士が「發昏」状態に滑り落ちる危険性は心身・環境の多方面に色々な形で存在する。

人類を代表してAlphaGoと対決する李世<sup>イ</sup>石<sup>セドル</sup>は中国で「高貴的葦草」(高貴な葦)と称えられた<sup>49)</sup>が、彼の華奢な体形や孤軍奮闘の姿と共に人間の特質を言い表す形容として妙味が有る。「人間は1茎の葦に過ぎない。自然の中で最も弱い物である。しかし、其は考える葦である。彼を押し潰す為には及ばない。蒸気や1滴の水でも、彼を殺すのに十分である。但し、縦令宇宙が彼を押し潰しても、人間は彼を殺す物より尊いであろう。何故なら、彼は自分の死や自分に対する宇宙の優位を自覚しているからである。対して、宇宙は何

も知らない。」仏蘭西の哲学者・数学者・物理学者パスカル（1623～62）の『冥想録』（70）の此の名言は、「宇宙」を「考える利器」とも言える人工智能に置き換えても成り立ちそうな気がするが、些細な事で大打撃を受けかねない人間の脆弱さが棋士や其の碁に現れる例は数え切れない。日・中・韓の棋士が敬愛して已まない藤沢秀行名誉棋聖は惜しくも誤嚥で肺炎に罹り、83歳で逝去し（2009.5.8）呉清源九段の様に100歳まで神業を伝授し続ける事が出来なかった。呉と共に「新布石革命」を起し（1933）多くの一流棋士を育てた「大豪」木谷實九段は、棋士の脳の酷使振りを示す様に3度（54、63、73年）も脳溢血で長期静養を強いられた。

2015年に21歳で中国の名人戦を制した連笑七段は12、13年に気胸の手術を受け、1回目は術後の空路移動を医師に禁じられた為LG杯世界棋王戦8強戦（首爾）を棄権した。2年で20年強も背が伸びた発育で痩せ型の若い男性に特有の此の病に罹ったのである<sup>50</sup>が、棋士は国・歳を問わず痩身が多く又大食漢の木谷實等を例外として少食気味の印象が強い。「有錢難買老来瘦」（金が有っても老来の痩身は買難い）という中国の養生訓の通り、適度の痩身は肥満に由る不健康を避ける利点で長生きに繋がり易いと考えられる向きがある。超絶の技量や真摯な心構えで俱に「囲碁の神様」と呼ばれる呉清源と杉内雅男九段（1920～）は、高僧や「仙鶴」の様な風貌の痩身で其々人類史上の棋士享年と現役最高齢の記録を作っている。中国の『囲碁（囲碁）天地』半月刊（中国囲碁協会・中国体育報業〔新聞業〕総社）では、杉内夫妻（6歳年下の寿子夫人は女性棋士の世界初の八段）の昨今の活躍が何度も報じられ、2016年4月1日の第7期（号）の全120頁を使った李世乭対AlphaGo戦の特集にも、総題と為る長文（1～19頁）の巻頭記事「驚世七天」（世界/李世乭を驚かせた7日間）の中で、杉内九段対大西竜平初段（15）との公式戦最大年齢差対局が写真付きで紹介されている。筆者の楊燦はAlphaGo衝撃が起きた翌日（3.10）の此の1局（第65期王座戦予選C）から、勝負を超えて進歩を求める老棋士の姿に囲碁の人を感動させる力と不滅の未来を見出した。中国で羨望の的と為る杉内夫妻は囲碁の「イメージ・キャラクター」の高齢層代表として最適であるが、世界1の長寿国に於いても健康的な長寿の傾向が際立つ戦後の囲碁棋士の早逝の例として、同じ痩せ型・努力家・紳士の加藤正夫名誉王座（1947.3.15～2004.12.30）が思い出される。彼は日本棋院理事長利光松男の体調不良に由る退任（04.4）で再建の為に後任を引き受け、役職と対局の両方に全身全霊を注ぎ込んだ過労が祟って<sup>51</sup>脳梗塞に倒れ不帰の人と成った。『囲碁天地』15年第1期に載った楊燦の特別記事「加藤正夫十年祭」（中国では七回忌を重んじる日本流と違って逝去記念の節目は生誕祝いと同様の10年）では、名棋士の道程に対する回顧と改革の為の「殉職」に対する痛惜の内容が全9頁の半々を占めたが、心労が限界を超えた12月7日の突如異変は脳を直撃した点で棋士の宿命さえ感じさせる。中原誠将棋名誉王座も08年8月12日の第58期王将戦2次予選準決勝で木村一基八段（A級）との難しい勝負を制した後、感想戦の最中に脳内出血で倒れて半身麻痺の後遺症を抱えて了い、大腸癌の発見・手術も加わって翌年3月

31日を以て61歳で引退した<sup>52)</sup>。

持ち時間が各数時間と為る1局の消費で体重が2~3<sup>キ</sup>減って<sup>しま</sup>了う事は日常茶飯事であり、例えば作家三好徹は『五人の棋士』(講談社、1975)の第1章「巨人—呉清源」の中で、36年頃の1日制の公式対戦の「勝負がつくまで、徹夜が常識だった」有様を記し、「およそ棋士は、一局の勝敗で、約二キロくらいやせるといふ。人によっては、差はあるが、それくらい精魂こめて打つのである」と書いている。元々丈夫でない呉は其の年の7、8月の暑い最中に17局も打つ過密日程の所為で胸を病み、長い自宅静養と翌年6月からの1年3ヵ月の入院生活を送り38年春まで対局を休んだ<sup>53)</sup>。長距離疾走で消耗が激しい体力を補う為「燃料」と為る栄養補給が不可欠と思われる(因みに「頑張る/れ」に当る中国語の「加油」は字面通りの「油/揮発油を」意と通じる)が、消化が脳の負担に成らない様に対局休憩中の食事を軽めにするか抜く棋士も少なからず居る。20代まで確り食べる「ガッツリ派」だった三村智保九段は40歳(09)の時の雑文で、最近<sup>エッセイ</sup>は消化力が落ちたのか食べた後に頭がぼーとする気がする<sup>あぶら</sup>と書いた。前年のNEC杯で井山裕太(八段)と打つ時30秒の早碁に備えて空腹で控室に入ったら、美味しそうな弁当が出されていてつい食い付いて了ったが、負けた後「それはイケナイね。頭働かないよ」と趙治勳(25世本因坊)に言われたとも書いている<sup>54)</sup>。03年のNHK杯制覇・テレビ亜細亜杯準優勝等早碁も得意な棋士の体験は真実味が強いが、熾烈さ・緊張度が蹴球に勝つとも劣らぬ囲碁の棋士及び人間の脳の繊細さは想像を絶する。

『昭和囲碁風雲録』第17章「高川秀格の時代」の第1、2節「新星、高川秀格の登場」「難産の交流対局」に、第7期本因坊戦7番勝負(1952)に見る当事者しか痛感できない棋士の重圧が記してある<sup>55)</sup>。今期の予選勝ち抜き戦は例年なら前期の挑戦手合終了直後51年7月にも始まるべきだが、50年9月13日に独立した関西棋院の棋士の参加資格で採めた挙句11月に漸く開始した。第6期で橋本宇太郎本因坊か坂田栄男七段の挑戦に応じる時に出した唯一の条件の通り、同棋院の出場者は日本棋院に所属すべしという規定が済し崩しにされた形で、日本棋院の30名と其処から分裂した関西棋院の六段・五段各3名の参加と為った。予選総当り戦に勝ち進んだ宮下秀洋七段・高川格七段・鯛中新六段(関西棋院)・瀬川良雄五段、種子組の木谷實八段・坂田栄男・長谷川章七段と合せて7人で総当り戦を争った(種子組の藤沢庫之助九段は呉清源との10番碁や4番碁に専念する為として欠場した)。長谷川・瀬川以外の5棋士が4勝2敗で並ぶ大混戦の末に5人同率決戦(勝ち抜き戦)が行われ、高川が坂田を決勝戦で破り橋本昭宇(本因坊位に就いた宇太郎の雅号)への挑戦者と成った。著者中山典之曰く、此の結果には「日本棋院は落胆したという。日本棋院のエースは、何と言っても藤沢九段であり、木谷八段であり、坂田七段だった。高川七段はその他多勢のクラスであり、今年<sup>こ</sup>は駄目だ、との思いが強かったのである。逆に関西棋院側としては、これは頂きと思ったことは想像に難くない。しかしながらこの実績皆無に近かった新鋭高川が、競馬で言えば大穴を出してしまっ

たのである。/この時点では、まさか、格下の高川が橋本を四対一で破り、本因坊戦九連覇をとげることになるとは、誰一人思わなかった。当の高川七段さえも、本因坊になったとき、何が起こったか分からぬかの様に、あっけらかんとしていたという。」「火の玉宇太郎と、流水不争先の高川ではテンポが合わない。坂田でなくて高川を出したのは、結果的に日本棋院の妙手だったのかも知れない」とも講釈しているが、「力戦魔王」李世石対「上善如水」のAlphaGoの5番碁と重ねて反芻すれば興味深い。

精神的な心構えは整えたつもりでも、頭に血がのぼり、体はしまいまで緊張し切っていた。私は対局前夜も、打掛けの夜も、文字どおり一睡もできなかったのである。食事は二日間を通して、一口か二口、のどを通っただけ。

これでは勝てるわけがない。

今考えると嘘のような話だけど、事実はそのとおりだった。本因坊戦という当時唯一のひのき舞台に臨んで、三十六歳の私はまるで生娘みたいだった。この生娘は興奮し、鼻血を流した。

第二局目からは睡眠薬を持参し、眠ることだけを考えて、対局に立ち向かった。そして第一局でいい碁を打った経験から、不思議にもやれるという自信が湧いてきたのだった。

初戦で歴史的な見損じで好局を落した後4連勝を果たした高川は後に斯く振り返ったが、中山典之は『秀格烏鷺うろばなし』（日本棋院、1982）の此の件を引いて次の様に語った。「棋士の対局が、いかに命を削るものかは、この一文でお判りいただけよう。そして賢明な高川は、勝負は睡眠だと覚り、万全の対策を講じている。かくて“生娘高川”は、第二局から、ふてぶてしい“たぬき高川”に変身したのであった。」上記随筆集の中の2局目の自戦回顧として、「私はゆっくりと打ち進めてコミにかけ、橋本さんがヨセでユルんだため意外な大差となった。私の碁を“まるでぬるま湯につかっているみたいだ”と橋本さんが評したのは、この碁の局後である。/食欲は相変わらず乏しい。ベルトの穴一つ分、痩せた」と有るが、『昭和囲碁風雲録』の著者は最後の点に就いて自らの実感を披露している。「ただ坐っているだけで痩せるというのを読者は信じられぬかも知れない。これは何もタイトル戦に限らず、中山六段のようなヘボ碁でも対局時には一日で二キロほど痩せる。食物がノドを通らぬ為であるが、私の経験によるとベルトの穴と穴の間隔は約三センチ。一キロ痩せると一センチだけウエストが細くなるから、高川先生の体重を五十キロとすれば、四十七キロになったわけである。加えて睡眠不足とあればどうということになるか。棋士という職業も、あまり楽でない事がお分りいただけるかと思う。七番勝負でフルセットになれば、計算上では三掛ける七で二十一キロ痩せる筈だが、不思議なことに碁が終ると猛烈に食欲が湧き、私の場合は数日で元に戻るから心配はないが……。」李世石の前の韓国王者李昌鎬の名前と重なる様に囲碁の繁昌は鎬を削る苦闘の賜物であり、李



囲碁の「酷」と人智の「魔」—— 究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方 (1) (夏剛・夏冰)

李世<sup>セドル</sup>の対 AlphaGo 戦の苦労も単純計算で 10<sup>キ</sup> 有るかも知れない体重減には止まるまい。

「冷静水の如き高川は、第一局終了後に、本因坊の白 128 は歴史に残る妙手だが、僕の終局寸前の見損じも歴史に残る大見損じですね。と、他人ごとのようにこの碁を評した。高川七段は白の大石を仕止めた信じ、種石が抜けているの知らなかった。世に言われている“高川尻抜けの一局”とはこの碁の事である。』『広辞苑』や『日本国語大辞典』にも『囲碁百科事典〔改訂増補版〕』にも無い「種石<sup>たねいし</sup>」は、近義語の「要石」と同じく彼我の死活・消長等に関する要点と為り捨てては成らない石を指す。考慮時間<sup>じゆうぶん</sup>が充分有るのに致命的な不覚が生じたのは魔が差したとしか言<sup>い</sup>い様が無いが、一流棋士も免れない見損じの第 1 級の典型例と為った大失敗に対する超脱<sup>じちよう</sup>の自嘲<sup>じちよう</sup>は、直ぐ吹っ切れて「狸<sup>たぬき</sup>」への変身で立ち直れた事の証で円熟の境地と大きな器<sup>うつわ</sup>を思わせる。対 AlphaGo 戦の際に当時の高川格より 3 歳若い李世<sup>イセドル</sup>は言わば「噴火争先」(造語)流で、盛<sup>けつき</sup>んな血氣<sup>けつき</sup>に由って闘争心が人 1 倍に強い反面しくじった時の動揺も激しい傾向が有る。第 2 回 Mlily 夢百合杯世界<sup>いごオープンせん</sup>囲碁公開賽決勝 5 番碁の第 2 局 (2015.12.31, 江蘇省南通) で柯潔に負けた後、今までの世界戦で経験した最も惨めな逆転負けと受け止め早く忘れて了<sup>しま</sup>いたいと言<sup>い</sup>った<sup>56)</sup>が、第 3 局 (16.1.2, 同省如皋) の連敗で王手を掛けられた後は再び重い精神的な打撃<sup>ダメージ</sup>を受け、独りで坐って沈痛な自省<sup>ふけ</sup>に耽り続け翌日 (次局の前日) の午前 10 時頃に漸く寝台に着いた<sup>57)</sup>。

### 僅差決着の悲喜劇と殺人的な対局条件に窺える碁の厳酷

AlphaGo 対欧州王者<sup>チャンピオン</sup>と韓国 2 位の 5 局碁の間に江蘇の 2 市で行われた此の 5 番勝負は、人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>強豪の参入で始まった碁の新紀元の前夜祭に相応しい劇<sup>ドラマチック</sup>的な壮烈さを呈した。前回の本戦 1 回戦 (2013.7.9, 北京) では韓国勢 18 人中の朴廷桓<sup>パクジョンファン</sup>九段 (20)・李昌鎬<sup>イチャンホ</sup>九段 (37)・姜東潤<sup>カンドンユン</sup>九段 (24)・金志錫<sup>キムジソク</sup>九段 (24) 等 12 人が敗れ、2 回戦 (7.11) で李世<sup>イセドル</sup>等 4 人が突破できず、16 強入りした崔哲瀚<sup>チェチョルハン</sup>九段 (28)・趙漢乘<sup>チョハンスン</sup>九段 (30) も 3 回戦 (8.9, 上海) で挫け、日本勢の 3 人中唯一踏ん張った結城聡<sup>ゆうきさとし</sup>九段 (41) の敗退と共に中国の 8 強<sup>はつきよう</sup>独占を許した。種子無し<sup>シード</sup>の 1 回戦で 8 人の世界戦優勝経験者 (中国 4, 韓国 3, 中華台北 1) が落馬し、同年で恰度<sup>ちやうど</sup>四半世紀経った世界戦の歴史上優勝最多 (当時 17 回)<sup>58)</sup> を誇る李昌鎬<sup>イチャンホ</sup>は、中国の「老 (万年) 初段」(4 年前に 15 歳で入段した後昇進していない) 雷震坤<sup>れいしんこん</sup>に倒された。雷青年は抽選で自分の番号を引くと直ぐ踵を返し自宅の電腦で対戦相手を確認したが、憧れの李だと知った時「名気大」(知名度が高い)程有り難いと思う心理から大喜びした。国内 236 位の雷は偶像に当たった幸運を噛み締めつつも萎縮せず相手の行き過ぎを咎めた<sup>59)</sup>が、彼のもう 1 人の偶像である李世<sup>イセドル</sup> (同 2 位の 14 回) を撃破した半昱廷<sup>びいく</sup>四段 (17) は、6 年前の入段以来 12 人の世界戦優勝経験者 (中国 8, 韓国 3, 日本 1) を下した事が有り、今回も「世界冠<sup>チャンピオンキラー</sup>軍殺手」

の異名通り其の内の3人と李世石に勝ち初めて世界王者と成った<sup>60)</sup>。半との苦戦を強いられた李は休憩（開始2時間半後の12時半から1時間）中に食事せず、誰も居ない対局場で盤面に向って打開策を考え続け其の間1本の酸乳で腹を拵えた<sup>61)</sup>。全局終了後も棋士等が去った片付け作業中の会場の隅で記録係用の電腦で敗因を検討した彼<sup>62)</sup>は、抑え切れない「哀兵」の悲情が発酵した結果「倍返し」の捲土重来を次期で達成した。

第2回同棋戦では前回大番狂わせを演じ翌年に昇段した雷震坤は予選を通過できず、初の世界戦優勝で同年に九段に昇進した半昱廷は2014年10月に国内序列2位まで躍進した（翌月、翌々月は3位、4位と下落した）が、今回は1回戦（15.7.7、北京）で前回の自分と同じ17歳の韓国の李東勲五段に碎けた。李世石は謝爾豪二段（16）、卞相壹三段（18）、丁浩二段（15）、唐韋星九段（22）を連破し、準決勝3番勝負で安成浚六段（24）に2連勝し（11.22、24）決勝進出を果たした。会心の快進撃は世界戦優勝経験者の唐を除く相手に低段者が多い所以だとも思われようが、柯潔が勝ち抜いた秦悦欣四段（23）、張強四段（23）、王沢錦三段（16）、戎毅四段（20）は平均段位が更に低いので、前回の若手優勝に輪を掛ける様な若手の目覚ましい躍進が時代の節目を感じさせる。世界戦初の1ヵ国に由る8強独占を遂げた前回の中国勢の独走は『囲棋天地』の特集で、「強勢」「強者運強」（強い者は運も強い）、「夢一樣的合囲」（夢の様な合流）の題で謳われた<sup>63)</sup>。囲碁の「囲」に引っかけた「合囲」は「完全に包囲する」「両手を伸ばして抱える」意が有るが、中国勢の完封で8強に入れなかった韓国勢は悪夢の再来に成らじと奮起・抗争した結果、3人が4強入りし準決勝で朴永訓九段（30）が柯潔に冷汗を掻かせた（1:2、3局目は11.25、安徽省合肥）。

韓国は中国に越される情勢に迫られて2013年に中国に倣って国家選手団を立ち上げたが、李世石は天馬空を行く様な孤高の性格の為か集団研究に参加する事が従来無かった<sup>64)</sup>。今回の決勝に備えて崔明勲九段（40）が初戦（2015.12.30）の前夜に2時間も掛けて、李が自ら弱点とした布石に関する国家選手団の研究の最新成果を提供し入れ知恵した<sup>65)</sup>。李の重視振りは準決勝開幕式に続いて3局目の前日の元旦晩餐会も欠席する挙動にも現れ、地元で招宴を催した協賛者は彼が同じ賓館の別の食事処で夕食を取った事で顔が潰れたが、冷徹・無礼と感じつつ大勝負の前の独自の調整と見て義務・義理無視の振る舞いを許容した<sup>66)</sup>。一方、準決勝の後勿々と帰国し次の相手が柯でも朴でも勝算が5割有るといふ彼の言葉に対して、柯潔は100割中の5割なら納得するといふ揶揄を以て95%の確率で自分が勝つと公言した<sup>67)</sup>。其々奇特な挙動と言説で「狂人」と言われた両者<sup>68)</sup>の対決は険悪な雰囲気の中で始まったが、劈頭で李が柯の本年白番35局全勝に終止符を打ち「憤怒」「難過」（辛い）と嘆かせた<sup>69)</sup>。第2局では柯は60億分もの「奕幣」（囲碁対局用情報蓄積電腦系統「奕城網」での所持累積点数）を賭け<sup>70)</sup>、碁の「博奕」（博奕。頭脳競技）の両面を現す行為で言動共に「狂野」の性情を顕にした。「争い碁に名局無し」といふ日本の格言の通り双方に「大昏着」（重大な失

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方(1)(夏剛・夏冰着)が相継ぎ、柯は相手の過<sup>ミス</sup>誤<sup>いのちびろ</sup>で命拾<sup>ちじやく</sup>いしたものの非勢を招いた悪手に腹が立って「恥辱の1勝」とした<sup>71</sup>)。天才と狂人との紙一重の差にも通じて一流棋士の智は「痴(愚。不明)に転じる事も有り、柯は死活に絡む判断の誤りと軽率な着手への懊惱<sup>おうのう</sup>が焦<sup>あせ</sup>りの悪循環<sup>あくじゆんかん</sup>を招き第4局を落した。双方の局後検討は柯が初歩的な見損じを認め辛い心理も有って極短時間で終わった<sup>72</sup>)

が、翌朝9時半に始まる再戦まで心身を最善の状態にして置く為の体力<sup>おんぞん</sup>の温存も合理的である。

決着を最終局に持ち込んだ展開は一流棋士の碁を多く観たい愛好者には好ましい事であり、夢百合杯の創設<sup>きようりゃく</sup>・協賛者倪張根(江蘇省恒康家居科技股份有限公司の創業者・会長、1975~)は、第1回の決勝戦の開幕式で挨拶する際に5局目まで進めて欲しいという希望を表明した<sup>73</sup>)。聶昱廷が3:1で世界戦優勝経験が中国最多(7回)の古力九段(30)を退けた後、新世界戦王者に「実は第5局に持って行ける様に今日は負けて欲しかった」と打ち明けた<sup>74</sup>)。彼の棋戦創設を思っていた契機は第17回(2012)三星火災杯世界囲碁マスターズ決勝の観戦で<sup>75</sup>)、同棋戦第9、12、13回優勝の李世<sup>イ</sup>石<sup>セド</sup>藝<sup>ドル</sup>と前々回優勝・前回準優勝の古力との3番勝負は、最初の2局(12.11、12)の李の半目勝ち、中押し負け(投了)で3局目まで行った。『広辞苑』の「フルセット【full set】」の「①ひとそろいの全部。完全なひとそろい。②テニス・バレーボールなどの試合で、規定の最後までセット」の後者に、「一の末、惜敗する」という用例が付いているが、翌日の最終局では古が正<sup>まさ</sup>に最も惜しい形で最小差の半目で負けた。今大会に於ける両者対戦成績の各2勝2敗1無勝負(引き分け)は伯仲<sup>はくちゆう</sup>する様に見えるが、李は要所の2局を取り俱に半目で3億圓(最終日の相場では約2400万円)を攫った。韓国開催と為る同棋戦では決勝は中国棋士が出る場合は中国(今回は上海)に移るので、現地の棋士・報道陣・愛好者には李の神算<sup>イ</sup>に感服<sup>しんさん</sup>しつつ古の惜敗<sup>たんそく</sup>を嘆息<sup>たんそく</sup>する声が多かった<sup>76</sup>)。然し愛国心<sup>い</sup>・鼻<sup>ひ</sup>肩<sup>い</sup>抜きで純粹に競技を観戦するなら予定最終局での僅差<sup>ほど</sup>決着<sup>ほど</sup>程<sup>ほど</sup>面<sup>お</sup>白<sup>う</sup>い<sup>こう</sup>結<sup>こう</sup>末<sup>こう</sup>は無く、「野球で一番面白い対戦得点は8対7だ」というルーズベルト(1933~45米大統領)の言(37.1)<sup>77</sup>)は、「野球脳」と対極的な「蹴球脳」が要る囲碁の勝負にも或る意味では適用できよう。本因坊挑戦の初体験で鼻血<sup>はな</sup>を流し見損じをした高川格は1敗後4連勝の快挙を遂げたが、第1回「中日囲碁擂台賽」でも鼻血が止まらぬ程緊張した汪見虹六段の初戦(東京)敗退後8:7で中国が逆転勝ちをした。第2回(86.3.20~87.5.1)と第3回(87.5.8~88.3.15)も9:8の中国の逆転勝ちなので、1回目で5連勝した江<sup>ちゆう</sup>鑄<sup>きゆう</sup>久<sup>きゆう</sup>七段等や何れも最後の砦<sup>とりで</sup>と為る主将聶衛平は国民的な英雄と成った。

翌年の世界非職業選手権や1989年全国個人戦で優勝した汪見虹は戦闘力が強いものの、相手の依田紀基五段(後に汪の九段昇進の96年に第1回三星火災杯優勝)には遜色<sup>サムスン</sup>が有り、加えて国の榮譽を背<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>う重<sup>おも</sup>圧<sup>お</sup>で前夜<sup>ぜんや</sup>碌<sup>ろく</sup>に眠れず想定外の局面<sup>うま</sup>に巧く対応できなかつた<sup>78</sup>)。高川格は「生娘<sup>きむすめ</sup>」として檯<sup>ひのき</sup>舞台<sup>ひのき</sup>に上がる前も「関西棋院から本因坊を取り戻せ」等の期待と、「高

川は駄目だろう。1局入れば良い処さ」等の諦観が聞える中で情緒不安定に陥ったが、帰属先への義務感と自信不足の進退両難から脱却すべく雑念は全て捨てるよう心に誓った。日本棋院も関西棋院も考えないで選手権にも拘る必要が無く実力を盤上に出し尽せば可い、という彼が到達した結論<sup>79)</sup>は昨今の若い世代の常識と為っているが、第7期本因坊戦と60年後の第17回三星火災杯の有り形とを比較しても隔世の感が有る。高川の挑戦権獲得から第1局まで持ち時間に就いて折り合いが付かず2ヵ月も空白が生じ、彼が希望した13時間は要求すれば受け入れられる取り決めが有るにも拘らず、橋本宇太郎は慣例の10時間を譲らず主催者の調整で最後は11時間で妥結した。秒読みが大の苦手である故に2時間の譲歩は辛かったと高川は奪取後も言い続けた<sup>80)</sup>が、三星火災杯では2005年から持ち時間の3時間を韓国の主流と為る2時間に短縮した。今も日本の主要棋戦に漂う牧歌的な時間感覚は韓・中・台の主催しか無い世界戦には見られず、同棋戦の過密日程、昼休み抜きや参加費自己負担は当代困碁を取り巻く環境の苛酷さを垣間見せる。

韓国『中央日報』・韓国放送公社主催、韓国棋院主管、三星火災海上保険株式会社協賛の同棋戦（中国では国内の協賛主名で「三星財産保険杯世界囲棋大師賽」と為る）では、決勝も含めて全て参加者には旅費も出さず宿泊先の手配もしない仕組みを取っているが、優勝賞金が相対的高く飢渴精神への刺激に繋がるから中国では肯定的な受け止め方も有る<sup>81)</sup>。世界戦の中で初めて昼休みを無くした点も対局者・関係者に負担・不便を掛ける反面、通常朝10時から午後3~4時までの連続対局に重大な支障を余り感じない棋士も少なくない。曾て聶衛平は第1回「中日囲棋擂台賽」の対小林光一戦（1985.8.27、静岡県熱海）で、昼の打ち掛けの1分前という時機を意識しない儘黒93を打った事を大いに後悔し、丸で相手に1時間の考慮時間を贈呈する様なものだから、分っていれば当然再開後に打つのだったと回想録に書いている<sup>82)</sup>。柯潔等の少壮実力派は自信の現れか時間節約の為か休憩直前の着手を保留しない事も有るが、食事休憩が無く成ると片方が有効に利用し片方が悔いを覚える様な後味の悪さも消える。古力は三村智保に対局時の飽食の害を指摘した趙治勳と同様チョコレートを食べ代りに愛用し、決勝戦の開幕式終了と第1局開始の隙間に中国代表選手団の華学明領隊に急遽用意を頼んだ<sup>83)</sup>。chocolateの古い中国語訳には奇しくも彼の名前を含む「朱古力」(zhūgùlì)が有るが、定訳の「巧克力」(qiǎokèlì)の字面の意の「巧く克つ力」は困碁の勝ちにも欠かせない。休憩無し制度改革は持ち時間の短縮化と共に世界戦の主流に成って行くかも知れないが、諸条件の益々の厳酷化に賢く適応する事は棋士乃至困碁の発展の必須条件に成りつつある。

8組の各4人中上位2人の16強入りを争う1回戦(9.4~6)は、各組で3戦の内2勝した時点で枠抜け(中国語では蹴球等の場合と同じ「[小組] 出線」)、2敗した時点で敗退するという2敗除外戦(同=「双敗淘汰制」)が採用されている。李世石・古力と日・中の1代の王者張栩(通称読み「ちようう」)九段(32)・聶衛平から成るF組は「死の組」(同=「死亡之組」)

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>・人工<sup>I</sup>4強の特質・行方 (1) (夏剛・夏冰)

と呼ばれた<sup>84)</sup>が、日・韓共催の2002年蹴球<sup>サッカー・ワールド・カップ</sup>世界<sup>アルゼンチン</sup>杯<sup>イングランド</sup>(5.31~6.30)のF組(優勝各2回・1回の<sup>スウェーデン</sup>亜爾然丁・<sup>アフリカ</sup>英<sup>アフリカ</sup>蘭+準優勝1回の<sup>ナイジェリア</sup>瑞典+阿弗利加屈指の強豪ナイジェリア)を想起させる激戦区のFは、英語のfall(陥落)や日本語の「不運」、中国語の「覆没」(fù mò)の略の様に響いて来る。抽選に由る順番で行われた初日の2局は古対張の中押し勝ち、李対聶の19目半勝ちと為り、翌日の第1戦敗者同士戦で聶は張に6目半負けをし脱落したが、第1戦勝者同士戦は世界戦史上初の4劫無勝負で1時間の休憩後に打ち直しを強いられた。盤上に4カ所の劫<sup>へいぜん</sup>が併存し互いに譲らず順に打って行けば永遠に終局できない故であるが、翌日の負担を考慮して古が提案した籤引きに由る決着は韓国規則に無いとして却下され、結局持ち時間が各1時間に短縮した追加対局で彼は中押し勝ちで枠<sup>きまつ</sup>抜けが先に決った。李は翌朝からの第3戦で張に中押しで勝った後「極度の疲労」を理由に夜の飲み会を欠席し、古は予定通り朴<sup>パクジョン</sup>廷<sup>ファン</sup>桓<sup>チュエチヨルハン</sup>・崔<sup>カンドンユン</sup>哲<sup>ウオンソンジン</sup>瀚<sup>ベクホンソク</sup>・姜<sup>セカズキ</sup>東<sup>イワ</sup>潤<sup>カン</sup>・元<sup>イ</sup>晨<sup>ウチナオシ</sup>湊<sup>オシ</sup>九段(27、前回優勝者)・白<sup>イ</sup>洪<sup>ホ</sup>淅<sup>ゴ</sup>九段(26、同年BCカード杯世界選手権優勝)等と杯<sup>さかずき</sup>を交して一同の2回戦進出<sup>いわ</sup>を祝った。姜は前日の追加対局は非常に素晴らしくて自分は目が離せず夕食も忘れたと古を讃えたが、祝杯を捧げられた古は準々決勝(10.10、韓国大田)と準決勝(11.12、14、同)で彼と朴を連破した<sup>85)</sup>。李の反故は敗因究明の為でもあり部屋で即席<sup>インスタント・ラーメン</sup>麵<sup>すす</sup>を啜りながら没頭した末に逸機<sup>ほつとう</sup>を突き止め、10日後に第1回桂林杯<sup>いっ</sup>世界<sup>き</sup>冠<sup>ま</sup>軍<sup>イ</sup>争<sup>ホ</sup>覇<sup>ゴ</sup>戦(広西壮族自治区桂林)決勝(9.16)で古に負けた後、当時の自分の白256が劫を解消せず普通に劫<sup>ごう</sup>立てに<sup>だ</sup>応<sup>い</sup>じれば半目勝てたはずだと主張した。古は其の考え直した着手に同感しつつも半目の逆転勝ちを断じて認めず、15分に亘る盤上の検討で李が示した複数の図に対して好手で応じ一々否定して見せた<sup>86)</sup>。日本語の「親しき仲にも礼儀有り」に擬えて言えば親しき棋士同士も対<sup>なぞら</sup>抗<sup>て</sup>心<sup>い</sup>を失<sup>え</sup>わないが、仲の良い相手<sup>い</sup>と雖も感想戦<sup>えいど</sup>で対局に続く2度目の負けを喫すのは棋士の活券<sup>こけん</sup>に関する<sup>こころ</sup>ので、決勝戦で2回も心憎い半目差で古を破ったのは負けず嫌いの李<sup>イ</sup>の見事な巻き返しと言える。

歌野<sup>うたの</sup>昌<sup>しょう</sup>午<sup>ご</sup>著長篇小説『葉桜の季節に君を思うということ』(文藝春秋, 2003)の冒頭部分に、柄<sup>がら</sup>の悪い主人公の男が情交で欲望を放出し切った後の泥沼<sup>どろぬま</sup>の様な疲労と虚脱感の描写として、射精<sup>エネルギー</sup>時の精力消費は100<sup>円</sup>を全力疾走したのと同じだという俗説を引き合いに出して、「二〇〇〇年のオリンピック・シドニー大会、九秒八七でゴールを駆け抜けたモーリス・グリーンが、ウイニングランの途中で見つけたスタンド最前列の巨乳ちゃんにタッチしたいと思っただろうか」と有る。第57回日本推理作家協会賞等の栄冠に輝いた秀作の悪趣味<sup>いっ</sup>な1<sup>せつ</sup>節<sup>せつ</sup>を囲碁論に用いるのは、畑<sup>はたけ</sup>違<sup>ちが</sup>い<sup>い</sup>・筋<sup>こう</sup>違<sup>じょう</sup>い<sup>い</sup>のみならず高尚な智力遊技への冒瀆として叱られても反論する余地が無い。何しろ1949年に大手合に由る昇段制度で初の九段と成った藤沢<sup>ほうさい</sup>沢<sup>さい</sup>斎<sup>さい</sup>(前出の「庫之助」が本名、秀行の甥)は、幼い頃「碁は将棋より品が良い」とする説を信じて好きな両方から囲碁の道<sup>えら</sup>を扱<sup>あ</sup>んだのである<sup>87)</sup>。敢えて卑俗な比喩<sup>ひ</sup>を借<sup>ゆ</sup>りて説<sup>と</sup>いたいの<sup>は</sup>究極の頭脳競技の精魂<sup>せいこん</sup>を<sup>い</sup>尽<sup>せ</sup>す死闘<sup>しとう</sup>の<sup>い</sup>壮絶<sup>さう</sup>さ<sup>だ</sup>であり、古力<sup>イ</sup>・李世<sup>せ</sup>石<sup>せき</sup>が4劫発生に至る駆け引きで全力を

傾けた後に予期せぬ行き直しを課され、敗者が「以逸待勞」（養った鋭気を以て疲弊した敵を迎え撃つ）の好敵手に挑む成り行きは、曾て銭宇平が「殺人的」と嘆いた半月の内11局打つ体験よりも殺人的だと中国の観戦記者が言う<sup>88)</sup>。銭九段は重圧に押し潰されたかの様に20代半ばから何度も体を壊し33歳で休業したが、劫・終盤戦とも当世日本1の張栩を不利な条件下で退けた李は33歳でより強靱さが要る試練に直面した。第1、2局と第3、4局が2日連続で1週間中の休みが2日しか無い対AlphaGo戦は、体調管理の生命線と為る睡眠の重要性と情緒波動の可能性を考えれば殺人的と言えよう。不眠不休が可能で感情を伴わず動揺も無い電脳運用指令体系との対戦は不平等の様に思えるが、彼は相手の予想以上の強さを仮に予め承知していたとしても辞さなかつたはずである。到頭職業棋士に勝った人工知能の挑戦を撃退しようとする決意が決断の決め手であろうが、「争強好勝」（強きを争い勝ちを好む）の意欲・闘争心が無くては囲碁の発展も無い。

## 注

- 1) 『フジサンケイビジネスアイ』紙に曾て「グローバル・ストレス・ポイント (GSP)」の連載が有り、危険性項目、衝撃の度合に於いて常に「インターネット崩壊」が首位に出ていた。例えば2008年の師走初日(12.1)の掲載分では1位、「最高」と為り、2~5位の「中国と台湾の軍事衝突」「米国によるイラン攻撃」「鳥インフルの人への大感染」「米国の深刻な不況」は、衝撃度が1段下の「高い」である。同情報(戦略的な分析で定評が有る英国のオックスフォード・アナリティカの政治・経済分析報告書「デイリー・ブリーフ」)の発信は、ニクソン政権で毎朝世界情勢を米大統領に報告する「ザ・プレジデント・デイリー・ブリーフ」をキッシンジャー國務長官と共に担当したヤング博士が1975年に開始し、リーマン衝撃直後の上記時点では49カ国の政府や国際連合等の国際機関、160余りの世界的な企業・金融機関に提供されていた。
- 2) 「マイナス金利、問題/パフェット氏 パークシャー総会で」(オマハ〈ネブラスカ州〉=山下晃)、『日本経済新聞』2015年5月2日。
- 3) 2016年3月22日の全国主要紙に、「AIと“共著”1次審査通過/8割方人手が加えましたが…/星新一賞 応募の小説」(『朝日新聞』、板垣麻衣子)等、開発・研究者の報告会に関する記事が有り、『毎日新聞』4月5日夕刊の「AI小説が星新一賞1次審査パス/学習機能を使えない壁/人工知能は曖昧な判断基準が苦手?」(内藤麻里子)等の詳説も出ている。
- 4) 「プロ棋士への挑戦終了/コンピューター対局で学会」、『産経新聞』2015年10月12日。
- 5) テレビ劇『半沢直樹』(TBS、2013年7月7日~9月22日、10回。原作=池井戸潤、脚本=八津宏幸)の主人公の台詞。
- 6) 「居安思危話改革 中国国家囲碁隊領隊華学明七段訪談録」(本刊記者/采访、整理)、『囲碁天地』2016年第1期、10頁。
- 7) 「伊藤、金星 世界女王に4-2/“無欲”で5度目の正直」、共同通信社2016年4月14日。
- 8) 「ラグビーW杯大金星/“勇敢な桜たち”称賛/観客席“ジャパン”コール/英紙“最大の番狂わせ”」(ブライトン [英国] =共同通信社、2015年9月20日)、「南アの勝利“確定的”…日本勝利のオッズは“34倍”」(『サンスポ電子新聞』同19日)。

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方(1)(夏剛・夏冰)

- 9) 本段落及び上の段落の論述で言及したバフェットの事績は、英語圏のみならず日本・中国でも数多くの出版物に見られている。和文文献として主に依拠したのは、シュローダー著(2008年)/伏見威蕃<sup>ふし み い わん</sup>訳『スノーボール ウォーレン・バフェット伝』(日本経済新聞出版社, 09年)、ロー著(07年)/平野誠一<sup>ひらの せいいち</sup>訳『新版]バフェットの投資原則』(ダイヤモンド社, 08年)、桑原晃弥<sup>くわはらてるや</sup>著『ウォーレン・バフェット 巨富を生み出す7つの法則』(朝日新聞出版, 11年)等である。
- 10) 庄司草也<sup>しょうじたくや</sup>『世界 No.1 投資家バフェットの謎 何がその成功をもたらしたのか?』(技術評論社, 2010年)の冒頭に掲げられた「パークシャー・ハサウェイの投資先の推移」の一覧に、売却益は取得価格の578.9%に当たるという概算が有る。
- 11) 「邱永漢 公式ウェブサイト」の「邱永漢の略歴」に、「1960年(36歳) 1959年より始めた株式投資により、成功を収める。自身の投資が1年で数十倍になり、成長企業への投資法がマスコミに取り上げられ、“株の神様”と評される」と有る。
- 12) 邱永漢『お金儲けについてズバリ答えます!』(海竜社, 2003年)でも言及された(42~43頁)様に、彼が『再建屋の元祖——新説・二宮尊徳』(日本経済新聞社, 1983年)で取り上げた此の名言は、一般人から田中角栄までに感銘を与えた。
- 13) ルーミス著(2012年)/峯村利哉<sup>みねむらとしや</sup>訳『完全読解 伝説の投資家バフェットの教え』(朝日新聞出版, 14年)に、BYDに投資した経緯・発想等が詳述されている(443~455頁)。
- 14) 各年の報道の事実関係と共に、深川宝琉<sup>ふかがわほうりゅう</sup>の随想「“投資の神様”バフェット氏に群がる中国人と金運財運」(「ホウリュウの開運鑑定ダイアリー」[ameblo.jp/starfortune], 2015年9月12日)の中の、権利獲得者の信用度・自社株価を上げたい<sup>かわざんよう</sup>皮算用と投資の極意を学びたい<sup>きん</sup>動機に対する指摘が興味深い。(本稿の連載第1回で引用した<sup>ネ</sup>電腦<sup>ト</sup>網<sup>ワ</sup>情<sup>ジ</sup>報<sup>リ</sup>の最終<sup>ネ</sup>閲覧<sup>ト</sup>日は、校了の16年6月6日である。)
- 15) 邱永漢『中国人と日本人』, 中央公論社, 1993年, 69頁。
- 16) 高曉松『魚羊野史』第2巻, 湖南文芸出版社, 2014年, 269~275頁(「推動物人類発展的個人電腦」は274~275頁)。
- 17) 高曉松『魚羊野史』第3巻, 広東人民出版社, 2016年, 304~305頁。
- 18) 高曉松『魚羊野史』第1巻, 湖南文芸出版社, 2014年, 244頁。
- 19) 「アリババ, 海外開拓加速/巨額の調達資金生かす/経営の透明性カギ/ソフトバンク含み益8兆円/孫社長“株売る気ない”」(『日本経済新聞』2014年9月20日, 上海=菅原透)等。
- 20) 「アローラ氏に165億円/ソフトバンクが報酬/孫氏後継候補」, 『日本経済新聞』2015年6月20日。
- 21) 「ソフトバンクアカデミア特別講義 Singularity~情報革命が導く世界~」, 同社公式ウェブ・サイト *SoftBank*, 2015年11月22日配信(動画・資料・アローラとの対談「シンギュラリティ時代のソフトバンクグループ~ソフトバンク1.0から2.0へ。変革のための戦略~」付き)。
- 22) 「ロボ量産 鴻海と合弁/ソフトバンク年内にも/ヒト型普及へコスト減」, 『日本経済新聞』2015年6月17日。
- 23) 「『暁説』第二季海外之旅 讓我們更了解世界」, 「央視網」2013年12月2日(「新華網・新華娛樂」より転載, 筆者・日付は未記載)。
- 24) 「韓寒」(「維基百科, 自由的百科全書」繁体字版)等に拠る。
- 25) 中山典之『昭和囲碁風雲録』(岩波書店, 2003年)岩波現代文庫版(14年), 上巻283頁。
- 26) 「土田正光の碁苦楽笑劇場 怪物伝説 藤沢秀行名誉棋聖/妻5人子15人/借金は億単位/棋聖戦6連覇/酒漬けの毎日」, 『東京中日スポーツ』2015年8月18日。一夫多妻制の無い現実に反する「妻5人」等の記述に違和感や疑問を覚えるが、「ウィキペディア フリー百科事典」の「藤沢秀行」の項

- 目の12の出典中1/3も占めた記事なので、此処で引用した上で権威有る遺族の証言と照らし合わせる事にした。
- 27) 藤沢モト『大丈夫、死ぬまで生きる 碁打ち 藤沢秀行——無頼の最期』, 角川書店, 2012年, 233~234頁。
- 28) 藤沢モト『勝負師の妻——囲碁棋士・藤沢秀行との五十年』, 角川書店, 2003年, 186~190頁。
- 29) 「高峯松準備起訴韓寒」(「海峡都市報網」2006年3月24日), 「為替哥們陸川報仇, 高峯松找茬準備起訴韓寒」(「新華網雲南頻道」同25日, 『現代快報』より転載 [筆者・日付は未記載])。
- 30) 「警察は他県へ踏み込むことはできない…県境でひたたくりをしていた少年逮捕」(石田真一, response, 2002年8月2日)に拠ると, 大阪府警は前日に, 恒常的にひたたくりの犯行を続けていた15歳の少年3人を窃盗容疑で逮捕した事を発表し, 彼等は警察の管轄権を計算に入れて県境近くでの犯罪を重ねる等, 可也の知能犯であり且つ悪質だとしている。
- 31) 「胡耀邦1983年訪日側記——記者眼中的胡耀邦」, 「胡耀邦史料信息网」(『中華儿女』誌より転載, 筆者・初出は未記載)。
- 32) 「聶衛平: 鄧小平宴請劉小光 贈言激勵我擂台連勝」(『楚天都市報』記者鄧鵬偉), 「荆楚網」2007年8月23日。
- 33) 『渡邊恒雄回顧録』, インタビュー・構成=伊藤隆・御厨貴・飯尾潤, 中央公論新社, 2000年, 155頁。
- 34) 原非・張慶編著『毛沢東入主中南海前後』, 中国文史出版社, 1996年, 30頁。
- 35) ニクソン著(1982年)/徳岡孝夫訳『指導者とは』, 文藝春秋, 1986年, 365頁。
- 36) 「蒋介石王牌悍将邱清泉為什魔被鞭屍」, 「鉄血網」2015年4月3日(筆者・初出は未記載)。
- 37) 「金門戰役検討」(「中国報道週刊網」等)に掲載, 初出未詳)に出た此の評価は, 公表された毛沢東の言説には見当たらないが, 劉亜洲の特権的な地位を勘案すれば信憑性に問題が無い。
- 38) 「相場急落時の損失を抑え相場上昇に着実に乗る/人間の深い経験とぶれない機械の判断を組み合わせた投信」(DIAMアセットマネジメント運用ソリューション本部星野元伸×Longine投信部 [執筆]), Longine (株式会社ナビゲータープラットフォームが運用する個人投資家向け経済媒体) 2015年3月30日。
- 39) 『日本経済新聞』2003年6月26日の「主要指標」欄の「為替債券」の次の「短期」の報道は, 「無担保コール翌日物の加重平均金利は前日より〇・〇〇三%低いマイナス〇・〇〇一%。重平均金利がマイナスとなるのは史上初。外銀間で最低マイナス〇・一%の取引が成立」と言うが, 国内市場の史上初を指すのは自明である。
- 40) 相田洋・宮本祥子『NHKスペシャル マネー革命 [第1巻] 巨大ヘッジファンドの攻防』(日本放送出版協会, 1999年)第6章「一日で五〇億円を失った天才トレーダー」第1節「大暴落で持ち株のすべてが吹き飛ばされた」の中で, 「私たち素人集団のにわか勉強が一段落した」97年10月27日の此の出来事に就いて, 同月31日の『ファイナンシャル・タイムズ』紙(英国)の記事「株式大暴落でニーダーホッパー・インベストメントが破綻」の全文が引用されている(268頁)が, 「損失額は五〇〇〇万ドル(五〇億円)とも三億ドル(三〇〇億円)ともいわれている」という件の括弧内の換算は, 当日の1ドル=約122円にも番組編集済みの翌年10月上旬の前半までの同130円台前半にも合わない(編集終了時期は相田洋・藤波重成著同書第3巻『リスクが世界を駆けめぐる』[出版社・年は同上]345頁に拠る)。損失額を訊くNHK取材班の質問に対する当人の答えは, 「途方もない額だよ。あまりにも莫大で怖くて言えない。一〇〇億円よりは少なく, 一億円よりはずっと多いとだけ言っておこうか。アメリカでは七ケタから九ケタのどこかだといわれている」と為っている(334頁)が,



囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工<sup>A</sup>智能<sup>I</sup>4強の特質・行方(1)(夏剛・夏冰)

円と2桁違う米ドルとの混在が<sup>きがか</sup>気懸りである。又、5千万<sup>おもしろ</sup>ドルの追証が調達できず破産に追い込まれた経緯や損失額を180億円と推測した関係者の証言(348頁)から見れば、損失は追証の金額に止まらず発生前に<sup>あつ</sup>預かっていた保証金の分も含まれるであろうが、ニーダーホッパーは資産の何倍の規模の投機をしたのかという問いに対して、「答えられないね。私にとって堅実な部類の投機だったとだけ言っておこう」と明言を避けた(340頁)ので、「一日で五〇億円を失った」とする断定に疑問が持たれても真相は<sup>わか</sup>判らない。

- 41) 注40文献, 288頁。
- 42) 中共中央文献研究室編, 逢<sup>ほう</sup>先知・金沖及主編『毛沢東伝(1949-1976)』, 中央文献出版社, 2003年, 上巻824頁。
- 43) 遊川和郎『強欲社会主義 中国・<sup>グローバル</sup>全球化の功罪』(小学館, 2009年)10頁に言及が有る。
- 44) 張佐良『周恩来的最後十年』(上海人民出版社, 1997年)日本語版(早坂義征訳『周恩来・最後の十年』, 日本経済新聞社, 1999年)300~301頁。
- 45) 沈果孫「擂台賽主將決戰瑣記」, [上海]『圍棋』月刊1987年第7期, 17頁。
- 46) 夏剛「“文革”後の中国文学と日本の戦後文学」, 『文学』(岩波書店)1989年3月号, 38頁。
- 47) 閻長貴「“四個偉大”是誰提出来的」, 『中国共産党新聞網』2006年8月18日。
- 48) 張正隆著『雪白血紅』, [香港]天地圖書有限公司, 2002年, 136頁。
- 49) 楊燦「驚世七天」で引用された<sup>ネット</sup>電腦網上の論評(『圍棋天地』2016年第7期, 13頁)。
- 50) 李昕「我就是想贏棋」, 『圍棋天地』2015年第23期, 9頁。
- 51) 武宮正樹『盤上に夢と元気を——宇宙流が到達した圍碁観』, 河出書房新社, 2013年, 77頁。
- 52) 中原誠「私の履歴書<sup>㉑</sup> 大病 治療優先 引退を決断/半身マヒ抱え, 新たな人生」, 『日本経済新聞』2016年5月30日夕刊。
- 53) 三好徹『五人の棋士』, 講談社, 1975年, 33頁。
- 54) 三村智保「ママの味」, ブログ「三村圍碁.jp 圍碁棋士九段」2009年11月7日。
- 55) 中山典之『昭和圍碁風雲録』岩波現代文庫版, 下巻23, 26~27, 29, 31~33頁。本稿では同著の論考範囲を示す為<sup>に</sup>高川秀格著『秀格鳥鷺うろばなし』の引用も一括に入れたが, 現物(日本棋院, 1982年, 80~81頁)と照合した結果, 「橋本さんがヨセでユルんだため意外な大差となった」の「な」が「の」と誤記されたと判明したので, 原文に従った。
- 56) 張大勇「江南欲戰幾何」・張大勇観戦記「安復当年狂笑」, 『圍棋天地』2016年第2期, 8, 27頁。
- 57) 注56文献, 8, 29頁。
- 58) 世界戦の範囲規定に由<sup>こ</sup>って数字が<sup>こ</sup>変り統計は<sup>こ</sup>難しいが, 此<sup>こ</sup>処では中国<sup>ナショナル・チーム</sup>国家<sup>かんたく</sup>隊<sup>かんたく</sup>総<sup>かんたく</sup>教練<sup>かんたく</sup>俞<sup>かんたく</sup>斌<sup>かんたく</sup>九<sup>かんたく</sup>段<sup>かんたく</sup>の基準に依<sup>よ</sup>る「四分之一世紀的回望」(『圍棋天地』2013年第17期, 83~86頁)の<sup>データ</sup>数<sup>データ</sup>拠<sup>データ</sup>を採用した。同誌資料組(班)が<sup>まと</sup>纏<sup>まと</sup>めた1988~2012年の統計は対局数・勝率の順位等で示唆が多く, 総合的な実力が世界1と成<sup>な</sup>った中国の内外の有力棋士に対する評価や次の時代への意欲も示されている。
- 59) 王銳「強勢」(『圍棋天地』2013年第15期, 2~5頁)の中の「雷震坤——一戰成名」(4頁)。
- 60) 畢<sup>び</sup>昱<sup>いく</sup>廷<sup>いく</sup>解説・張大勇観戦記「拯救誰の時代」, 『圍棋天地』2013年第15期, 31頁
- 61) 注60文献, 31, 40頁。
- 62) 注60文献, 45頁。
- 63) 「強勢」は注59文献。「強者運強」は『圍棋天地』2013年第17期の記事(謝<sup>せい</sup>倩, 2~5頁)の題。「夢一様の合圍」は同号表紙の大見出し(下に「中国棋手包攬世界大賽八強」と続く), 及び「第1屆<sup>チヨハンヌン</sup>Milly<sup>らい</sup>夢百合杯十六強賽」対趙漢乘九段戦の王磊八段の自戦解説(39~51頁)の題。

- 64) 張大勇観戦記「安復当年狂笑」,『囲棋天地』2016年第2期,22頁。原文の「李世石從來不出席韓國の國家隊研究」は、1度も出席せず且つ参加する意思も無いという断定的な意味である。
- 65) 注64に同じ。文中崔明勳<sup>チェミョンフン</sup>を「領隊」(選手団団長。選手監督。引率者)と記した。
- 66) 注64文献,28頁。
- 67) 柯潔解説・張大勇執筆「月起月落(下)」,『囲棋天地』2016年第3・4期,179頁。
- 68) 注67に同じ。
- 68) 注67に同じ。
- 69) 注66に同じ。
- 70) 注66に同じ。
- 71) 張大勇「江南欲戦幾何」,『囲棋天地』2016年第2期,7~8頁。
- 72) 注71文献,30~32頁。
- 73) 張大勇「最長的一周 第1届Mily夢百合杯世界囲棋公開賽決賽觀戰記」,『囲棋天地』2013年第24期,22頁。
- 74) 注73文献,35頁。
- 75) 謝銳「簡單至真」,『囲棋天地』2013年第12期,6頁。
- 76) 賈倩「縁於此二人」,『囲棋天地』2013年第1期,4、5頁。
- 77) 「池井戸作品ドラマ化!」,『IN POCKET』(講談社)2014年3月号(大特集「作家と野球」),26~35頁。
- 78) 曹志林「中日囲棋擂台賽演義」第四回「開幕儀式 聶主帥針鋒相對/先鋒之戰 汪見虹滴血悲情」,『囲棋週報』提供/「新浪網」「新民圍棋網」轉載,2014年10月30日。
- 79) 『現代囲碁大系』(編集主幹=林裕,監修=橋本宇太郎・吳清源・高川格・藤沢朋斎・坂田榮男・藤沢秀行・林海峯・大竹英雄)第十八卷『高川格(上)』(高川格解説,村上明執筆<sup>むらかみあきら</sup>),講談社,1981年,180頁。
- 80) 注79に同じ。
- 81) 注76文献,3頁。
- 82) 聶衛平著,藤沢秀行監修・田畑光永訳<sup>たばたみつなが</sup>『聶衛平 私の囲碁の道』(岩波書店,1988年),257頁。
- 83) 注81に同じ。
- 84) 張大勇「簽」,『囲棋天地』2012年第18期,18頁。
- 85) 張大勇「飄雪の旅程」,『囲棋天地』2013年第1期,31~32頁。
- 86) 注85文献,32頁。
- 87) 藤沢朋斎『現代囲碁大系』第二十一卷『藤沢朋斎(下)』(藤沢朋斎解説,配島道雄執筆<sup>はいしまみちお</sup>,講談社,1983年)「序」,1頁。
- 88) 注85文献,31頁。

夏 剛 (立命館大学国際関係学部教授)

夏 冰 (京都囲碁道場師範)

## 围棋之“酷”与人智之“魔”

### ——顶级智力竞技的原理及中、韩、日、人工智能4强的特质、走向 (1)

2016年3月谷歌公司研制的围棋对弈软件“阿尔发高”(AlphaGo)近乎完胜世界超一流棋手,使认为电脑无法攻略这一顶级智力竞技的众多人士极度震惊并开始担忧围棋走向衰退。本文以“人工智能活跃元年”及“阿尔发高”的命名高度评价“人工智能”概念诞生60周年的进展,在中国、韩国、日本、人工智能竞争的新纪元到来之际对围棋的魅力及这4强的特质加以分析。

本部分首先注目1/4世纪以来国际互联网对社会的重大影响和近年实用人工智能的急速发展,从堪称超级文明利器的计算机日益支配经济领域的高级智力竞技——金融交易的现实为切入点,由“股神”巴菲特2011年起积极投资的IBM所推出的“深蓝”软件1997年击败国际象棋冠军,论及此次全然超出围棋界内外想像的“人类智力的终极堡垒”如最后1枚多米诺牌倒塌的结局。

基于本文密切联系与围棋原理相关的政治、经济、军事、社会、文化、体育等的多元视角,在此指出围棋对战需“足球脑”般地持续高度集中和棋手消耗不亚于体育运动等诸多严酷性;用解放军扫平大陆后因轻敌而惨败于强攻金门岛的教训来对照这番人机对弈前的盲目乐观;同时赞赏韩国第3代棋坛霸主李世石为维护人类尊严挺身迎击的“孤高的苇草”精神及斗志,并将其争强好胜的欲望和打造“阿老师”者的伟绩作为进取心驱动围棋及人类发展的范例。

(夏 刚,立命馆大学国际关系学院教授)

(夏 冰,京都围棋道场教师)

